ISSN 1342-2405

# D.H.ロレンス研究

第22号

2012

日本ロレンス協会

# 目　次

**論文**

"border country" の認識論 —— クリストファー・コードウェルからロレンスへ
……近藤　康裕　1

「島を愛した男」と D. H. ロレンスのコスモス
……井出　達郎　14

A British Canadian Soldier and a War Bride in "The Fox"
……Tomohiro YAMAMOTO　27

成長しなかった男たち —— D. H. ロレンス，J. M. バリ，帝国
……髙田　英和　39

**特別寄稿**

学会回顧録 —— 日本ロレンス協会草創期 ——
……和田　静雄　54

**書評**

Beatrice Monaco, *Machinic Modernism: The Deleuzian Literary Machines of Woolf, Lawrence and Joyce* ……三宅　美千代　65

Carl Krockel, *War Trauma and English Modernism: T. S. Eliot and D. H. Lawrence*
……角谷　由美子　69

飯田武郎『D・H・ロレンス文学にみる生命感 —— 自然，生命，神秘』
……鈴木　俊次　73

浅井雅志『モダンの「おそれ」と「おののき」—— 近代の宿痾の診断と処方』
……木下　誠　78

ロレンス研究文献……83
事務局からのお知らせとお願い……88
大会研究発表のための助成金……90
大会報告……93
会計報告……102
西村孝次賞発表および掲載論文講評……106
『D. H. ロレンス研究』第23号原稿募集要項……108
会則……110
役員一覧……113
編集後記……115

論　文

# “border country”の認識論
## ――クリストファー・コードウェルからロレンスへ――

近藤　康裕

D・H・ロレンスがマルクス主義者によっていかに受容されてきたのかを考えるとき，20世紀後半のニューレフトの論客たちがロレンスの仕事をその思想形成の核にしていたということは重要である．このことはしかし，マルクス主義者によるロレンスの再評価が，その死から四半世紀ほどを経て初めてなされたということを意味するのではない．1930年代にロレンスは，F・R・リーヴィス（F. R. Leavis）のような批評家だけではなく，「政治の季節」の申し子である共産主義者や社会主義者にも大きな影響を与えていた．本論では，ロレンスとニューレフト世代のあいだに来るひとりのマルクス主義者，クリストファー・コードウェル（Christopher Caudwell）をとりあげ，ロレンスを読むコードウェルと，ロレンスを読むコードウェルを読むニューレフトの論客たちの文章を読みながら，コードウェルが評価し，かつ批判したロレンスのテクストの問題と可能性を検討する．

I

アリック・ウェスト（Alick West）らとならんで代表的な20世紀前半のマルクス主義者のひとりに数えられるコードウェルは，1907年に生まれ1937年にスペイン市民戦争の戦場で死んだ短命の作家である．死後に出版された作家論・文化論 *Studies in a Dying Culture* では，ひとつの章がロレンスに割かれている．コードウェルは，資本主義のもとで生み出された芸術を，商品フェティシズムによって物象化した人間と人間との関係，人間と自然との関係の体現であるとみなし，それから抜け出せない作品を批判的に扱う．マルクス主義にもとづくプロレタリア文化

はブルジョワ文化を否定する革命のフェイズにおいて現れるのであり，その「すでに始まってはいるが，まだ議論するにはあまりにも新しすぎる」動きの「先鞭をつけた先人たちのなかでもっとも重要なのがロレンスである」と，コードウェルは英文学論*Romance and Realism*でロレンスを評価している（118）.

*Studies in a Dying Culture*においてコードウェルは，ロレンスがブルジョワ文化の典型たる芸術のための芸術に飽き足りなかった「真摯な芸術家」のひとりであり，「芸術をすてて社会理論へと向かい，思想の小説家，文学的予言者，プロパガンダの小説家になっているように思われる」と言う（48）．コードウェルが指摘するように，ロレンスの小説はときに抽象的な思想を滔々と披瀝する傾向にあり，指導者小説群に見られるようにプロパガンダ的な側面も有しており，同時代人のみならず後代の批評家たちから予言者として称揚されもした．加えて，ニューレフトの世代がロレンスを論じるときに依拠するテクストが，ここで言われている「社会理論」を書いたような文章の場合が多いことも重要な点である．

コードウェルは，ブルジョワが社会的諸関係によって「決定された個人」を認めずに「自発性ないしは非因果性の領域を保持する」（*Further Studies* 72）態度をとると見ているが，彼がロレンスを，結局はブルジョワ・イデオロギーの克服ができなかったと批判するのは，ロレンスの作品が社会的諸関係による「決定」から逃れる「個人」の「自発性」を謳い上げるような作風を持っているとコードウェルには見えたからである．こうした決定論による断罪はあまりに単純かつ短絡的だが，フランシス・マルハーン（Francis Mulhern）によれば，「コードウェルのマルクス主義は，ひとつには認識論的な，もうひとつには歴史的な，ふたつの関連しあうテーマにもとづいている」(40)．ここで歴史的なテーマというのは，資本主義の発展段階と生産様式の変化をそれぞれの時代に生み出された芸術作品は体現しており，産業資本主義の行き着く先にはプロレタリア革命の芸術が現れる，という典型的な唯物史観である．この歴史観において，ロレンスはブルジョワ文化を完全に克服するには至らなかったが，その作品は来たるべき時代の芸術の先触れとなった，という評価をもたらすのが認識論的なテーマである．

コードウェルは，ヘンリー・ジェイムズ（Henry James）やジョウゼフ・コンラッド（Joseph Conrad）以降の小説における語りの変化を，「ニュートン物理学と初期のブルジョワ小説の絶対的観察者」から，「観察者がいまや行為者である」

ような形式への変化であるとして，これを「認識論的操作」と呼ぶ（*Romance and Realism* 101）．同様にレイモンド・ウィリアムズ（Raymond Williams）は*Culture and Society* のなかで，"It is, rather, that his [Lawrence's] first social responses were those, not of a man observing the processes of industrialism, but of one caught in them, at an exposed point, and destined, in the normal course, to be enlisted in their regiments. [. . .]" と述べ，観察者が同時に当事者でもあるという認識論をロレンスの小説に見ている．さらに，"Tension would be apparent to him only in those who had escaped, or half escaped." と述べて，産業化の過程が強いる「緊張」はその過程から半分身を引くか逃れるかした者のうちに現れると論じている（202-03）．ここで重要なのは，ロレンスが社会の変容の過程を対象として観察すると同時にその過程に巻き込まれる主体として反応したという点であり，言い換えれば，対象に疎外を見出すにとどまらず，みずからその疎外の過程を生きることで変化に反応したということである．

こうした認識論は歴史観の問題とも不可分であるから，コードウェルの唯物史観とロレンス評価は認識論的テーマとの関連において考えられなければならない．ロレンスについて論じながら，革命のときには前進か後退いずれかの動きをとらなければならないが，前進をとればコミュニズム，後退は「原始的価値，神話，人種主義，民族主義，英雄崇拝」への回帰であってファシズムにつながると述べたコードウェルは，「ロレンスの解決が最終的にはコミュニズムではなくファシズムだったことが彼の悲劇である」と言う（*Studies* 56）．ここで後退に当たるとされているもののうちのいくつかは，これまでもロレンスを批判する際に指摘されてきたものだが，歴史の過程において観察者であると同時に当事者でもあり，のみならずその過程で生じる「緊張」をそこから半ば距離をおくことなしには把捉できなかったのだという，ウィリアムズが指摘したロレンスの立場の二重性を考慮に入れるとき，歴史的な変化への反応に前進か後退しか見ないコードウェルの歴史認識からは，彼の議論の一方の柱をなしていたはずの認識論的な配慮が欠けていると言わざるをえない．

コードウェルの歴史認識の問題を考えるために，ここで，トロツキイの *Literature and Revolution* を評したリーヴィスの文章に目を転じてみたい．「文化」という言葉の背後には「生産様式」に還元しきれない，「ブルジョワ」と言って

一蹴しえない何かが存在していることをトロツキイは認識しているのだと述べるリーヴィスは，"'The proletariat,' he [Trotsky] says, 'acquires power for the purpose of doing away with class culture and to make way for human culture.' And he insists that the necessary means to this consummation is to maintain continuity"(39) と書く．ロレンスのような労働者階級の出身者が「文化」にアクセスするというとき，その「文化」はブルジョワ文化と呼ばれるものも含むが，単線的な歴史の前方にプロレタリア革命を措き，ブルジョワ的なものを反動的であるとして退ける歴史観では，プロレタリアートがそうした文化に触れ，それを取り込みながら文化の拡張を進めていく過程を適切に評価できない．引用末尾の"continuity"という語は，このような点についてのリーヴィスの批判と洞察を示している．文化をめぐる両義的な問題は，単線的な歴史観が前提するブルジョワとプロレタリアートの対立構図によってではなく，歴史の複雑な「連続性（continuity)」という観点から理解されるべきだということを示したリーヴィスの指摘は，コードウェルが依拠した単純な唯物史観への同時代的な批判としても読むことができるだろう．

## II

ロレンスのテクストがはらむさまざまな問題は，このような歴史の「連続性」において見られなければならない．ウィリアムズは，"Lawrence's crisis—it's not hard to see—is a crisis of separation. [. . .] Still, to write of separation [. . .] proposes quite new problems in the novel as a form"（*The English Novel* 176）と述べ，「形式としての小説」を問題化する「分離という危機」を，さらに「コミュニティの経験の喪失」と言い換えている（182）．*Culture and Society* では，この「分離という危機」あるいは「コミュニティの経験の喪失」を "the cry of an exile" と表現したウィリアムズは，"The tragedy of Lawrence, the working-class boy, is that he did not live to come home."（212-13）と指摘している．「異郷生活者（エグザイル）」となることを強いられた「ロレンスの悲劇」は「形式としての小説」の変容に表れているということである．

ロレンスの作風の変容は，青少年期に炭坑の町で産業化の過程を生き，後半生は祖国を離れてオーストラリアやアメリカを転々としたのちヨーロッパに戻った経験と歴史の変化の連続性において，「形式としての小説」の問題として考察さ

れるべきものである．ウィリアムズと同様にロレンスの「異郷生活者」としての経験と小説との関係を指摘したテリー・イーグルトン（Terry Eagleton）は，「*Sons and Lovers* を特徴づけていた対象と反応との自然な交渉」がそのあとほとんど消失したと述べ，"The process [. . .] culminates here in a dramatic and often wild disproportion between event and response, public culture and private experience."（*Exiles and Émigrés* 214）と論じる．初期の小説から，二元論的で極度の抽象性を特徴とする *Women in Love* を経て指導者小説群に至る作風の変化は，ウィリアムズが論じたように「分離という危機」の体現であり，その分離は，社会と個人の分離として，「公的な文化と個人的な経験との不均衡」として表れた．

*Modern Tragedy* のなかでウィリアムズは，*Women in Love* におけるこうした分離について，社会的な側面からの分離は「避けがたく」諸個人からの分離に帰結し，「個人をあらゆる関係性のない状態で創作する」（138，強調原文）ことになると述べているが，ロレンスの「危機」と「悲劇」を体現する「あらゆる関係性」を欠いた抽象的な個人の前景化を，コードウェルはブルジョワ的だと批判したのである．ここで，その批判の土台にあった「決定」の問題をもういちど考える必要がある．「社会」や「歴史的な出来事」は「個人」や「個人の意志」から抽象，分離することはできないので，これを「分離」することは「疎外された客観論的な」社会概念に帰結すると指摘しながらウィリアムズは，"This is where the full concept of determination is crucial. For in practice determination is never only the setting of limits; it is also the exertion of pressures."と論じる（*Marxism and Literature* 87）．個人と社会の「分離」のみならず，「あらゆる関係性」を持つことの不可能性を極度の抽象で表現した「形式としての小説」の問題は「決定」の問題として，すなわち，歴史の変化がロレンスに加えた「圧力」に対する反応の臨界点である「限界」のうちに，いわば弁証法的に現れ出てくるものなのである．

ブルジョワ文化を超克できなかったとしてロレンスを批判したコードウェルは，個人の経験を「決定」するさまざまな矛盾の表出であると同時にその解決でもある，個と社会，私と公の「分離」の「限界」だけをロレンスのうちに見出し，その「圧力」から生じる弁証法的な可能性を看過している．*Illusion and Reality* で「文芸の基本は何か」と問うて，"Evidently it can only be a special form of the contradiction which produces the whole movement of society, the contradiction

between the instincts and the environment, the endless struggle between man and Nature which is life."(201) という答えを用意したコードウェルは，「矛盾」が持つ弁証法的機能を了解していたに違いないが，そうした「矛盾」を構成する対立構図の認識——すなわち彼の認識論的なテーマ——に問題があった．

この問題に関してE・P・トムスン (E. P. Thompson) は，"[T]he repeated generation of idealism and mechanical materialism, not as true antagonists but as pseudo-antitheses, generated as twins in the same moment of conception, or, rather, as positive and negative aspects of the same fractured movement of thought. [. . .]" と論じている (242)．コードウェルが用いた対立構図は真のそれではなく「擬似的な対立」であり，その対立はおなじ根を持つ動きの正と負の側面なのだが，「疑似的な対立」の構図によって，「矛盾」がもたらす「圧力」と「限界」との関係を連続性において見ることができなくなった．ロレンスが完全にはファシズムに与しなかった理由を述べながら，イーグルトンは，ファシズムが「ブルジョワ的リベラリズムに対するロマン主義的な有機体論の反応」である一方で，「おなじロマン主義の遺産の決定的な部分であった個人主義」を否定するものだったからであると指摘している (*Criticism and Ideology* 158-59)．ロレンスのファシズムを批判したコードウェルには，リベラリズムへの批判と個人主義という，ロマン主義の「矛盾」と両義性のロレンスにおける表出が読み切れなかった．

みずから直面した歴史的，社会的問題をこうした両義性において表現しようとしたロレンスの「形而上学」に見られるイデオロギー的な「危機」をめぐり，イーグルトンは前の引用箇所のあとで，"Lawrence's relation to that [ideological] crisis is then doubly overdetermined by his expatriatism."(160) と述べる．ここでも「国籍離脱」による「決定」が指摘されているが，ロレンスにおける「国籍離脱」あるいは「異郷生活者」の状態は，ウィリアムズが論じているように，資本主義による社会の変容を経験するなかで「半分身を引く（ハフ・イスケイプト）」ことを強いられた作家が，歴史を把捉する認識の問題に直結する．ロレンスの作品の変化は，産業化の過程を生き祖国を離れるに至った経験の「緊張」——歴史の真の「対立」から生じる「圧力」と，それに対するロレンスの反応との臨界点に現れた「限界」——において認識論的に見出されるべきものなのである．

## III

ロレンスに「形式としての小説」をめぐる問題と対峙させ，「社会理論」を提示するようなテクストを書かせたブルジョワ・イデオロギーについて，コードウェルは，それが「目に見えない力」として「外部からの圧力のように機能する」ものであり，"It gives to that culture a characteristic distortion which is not visible to those who still live within the framework of that economy." と述べる（*Further Studies* 116）．「いまだその経済の枠組みのなかで生きる人びとには不可視の特徴的な歪み」を与えたものとは産業資本主義であり，その経験がロレンスに「異郷生活者」たることを強いたのであった．

「故国喪失についての省察」と題するエッセイでエドワード・サイード（Edward Said）は，価値やアイデンティティが安定している変化なき社会から生まれた叙事詩を小説と対照させ，小説とは変化しつづける社会を生きる経験のなかで異郷生活を強いられた主人公が「あとにしてきた故国とどこかしら似ている新世界の構築を求める」ものだとして，"In the epic there is no *other* world, only the finality of *this* one. [. . .] The novel, however, exists because other worlds *may* exist, alternatives for bourgeois speculators, wanderers, exiles." と論じる（181-82, italics original）．「故国喪失」をもたらす真の対立と緊張とを経験する者が求める「べつの世界」とは，産業資本主義の現状に対置されるプロレタリア革命の世界でもなければ牧歌的な有機体的共同体でもない，こうした「擬似的な対立」の構図では見えない世界である．それがどういう社会で，どういう人びとがどのような関係性において形成している世界なのか，ロレンスは経験の臨界点で模索しつづけたものの，「形式としての小説」においては明確な答えを提示するに至らなかった．イギリスを舞台にユートピアの可能性を模索した*Lady Chatterley's Lover* では「異郷生活者」となる可能性が末尾で示唆されるし，*The Man Who Died* は神話的な場所での再生譚であって，具体的な社会像をともなうオルタナティヴな世界の提示ではない．

小説という形式に「べつの世界」を書き込みきれなかったロレンスのテクストは，評論やエッセイのかたちでそれを表現することになったと言える．*Women in Love* が「あらゆる関係性」を持つことの不可能性という「悲劇」を体現した

形式となったのとおなじころ，ロレンスは，「人びとは悲劇をうけいれ，悲劇とひとつにならなければならず」，それに必要とされる舞台が“a People's Theatre”であると主張した（“Preface to *Touch and Go*” 293）．そのなかでロレンスは，“A people's Theatre. Note the indefinite article. It isn't The People's Theatre, but A People's Theatre.”（289）と書いて，“People”に付くのが不定冠詞であることを強調していた．人びとが「悲劇」をうけいれ，それを演じることで，「悲劇」をもたらす「矛盾」と「圧力」を経験し，「疑似的な二律背反」の「限界」を超克する場として“a People's theatre”は想定されている．定冠詞で限定されない“a People”とは，ある特定の民族や国民でもなければ，ブルジョワ社会やプロレタリアート独裁の社会といった特定の場所に帰属を持つ人びとの集団でもなく，サイードの言う，故国喪失の状態にあって「あとにしてきた故国とどこかしら似ている」世界に見出されるであろう，未だ来たらざる人びとである．

このような「べつの世界」を作家に想像させた「危機」をコードウェルは「小説における認識論的な危機」と表現する（*Romance and Realism* 97）．コードウェルの言う「危機」を，“Modernism and Imperialism”でフレドリック・ジェイムスン（Fredric Jameson）が論じた，帝国という地理的空間の拡がりに対する「意識とそれをめぐる実際の知識との隔たり」と「その隔たりが生む不確実さ」に関連づけるハワード・ブース（Howard Booth）の議論（39）が適切なのは，産業資本主義の発展を支え，ロレンスの「異郷生活」を条件づけていたのがイギリスの帝国主義にほかならなかったからである．コードウェルが指摘した「その経済の枠組みのなかで生きる人びとには不可視の特徴的な歪み」を，その枠組みから「異郷生活者」として「半分身を引く（ハフ・イスケイプト）」ことを強いられたロレンスは把握することができ，物象化して極度に抽象的になった人間関係（の不可能性）として小説に描いた．しかし，認識を制約しつつ同時にその限界を超える帝国と無限の拡張を見せる資本主義との外部，すなわち「その経済の枠組み」の外部を経験的に把捉し表現することは可能ではなかった．

それゆえ「形式としての小説」は極度の抽象にとどまらざるをえなかったのだが，こうした抽象性は，社会主義と民主主義の成立条件を超越論的に論じたエッセイ“Democracy”のつぎのような一節ではむしろ必要とされる性質であった．

> [W]e cannot say that all men are equal. We cannot say A=B. Nor can we say that men are unequal. We may not declare that A=B+C. [. . .] One man is neither equal nor unequal to another man. [. . .] Comparison enters only when one of us departs from his own integral being, and enters the material mechanical world. Then equality and inequality starts at once. (715-16)

個人を等号で結んで比較するような安易な平等概念を批判し，個人の単独性こそが共同体の前提であるような民主主義のあり方を提示するこの文章を，「異郷生活者」としてのロレンスの「危機」を論じてきたウィリアムズが，「平等という考えから機械的な抽象性を取り除いた」議論であると評しながら引用している（*Culture and Society* 211）ことは注目に値する．等価性を前提する「機械的な抽象」こそ，資本主義の根本にある概念装置だからである．しかし，資本主義の外部を経験的に把捉できないことから生じる「認識論的な危機」は，経験の連続性において現れる新たな世界——サイードが小説の特徴として挙げた「あとにしてきた故国とどこかしら似ている新世界」——の想像を不可能にしたから，ロレンスには，経験の連続性を基盤とする小説という形式でオルタナティヴな世界を表現することができなかったし，"a People" を未だ来たらざる「べつの世界」の人びととしてしか示すことができなかった．

また，ロレンスの歴史的立場の両義性には，晩年の*Lady Chatterley's Lover*がイギリスを舞台にして再生譚を試みつつも，故国を離れる選択肢を示さずにはいられなかったように，「あとにしてきた故国」に作家を引き戻したナショナルなものの求心力と，ナショナルなものを基盤としつつもグローバルに拡張する帝国主義の遠心力とによって引き裂かれ，「危機」に直面した認識のありようを読み込まなければならない．これこそ本稿が論じてきた歴史の認識論的な把握によって可能となる読みであり，ロレンスのテクストにおける抽象性や不可能性を読むとは，「べつの世界」を小説という形式で表現しようと試みて叶わなかった作家の経験の痕跡を歴史の文脈において読むということである．

のちの世代，とりわけリーヴィスの「連続性」の概念を肯定的に引き継いで思想形成をおこなったニューレフト世代がロレンスのテクストを高く評価したのは，ナショナリズムが前景化すると同時に資本主義のグローバルな拡張が社会に

変容を迫りつつあった時代状況に対する作家の反応をロレンスのテクストが体現しており，このことが帝国終焉後の20世紀後半にも高い妥当性を有していたからであった．ロレンスが経験したモダニティは，ニューレフトの経験したモダニティと明確な連続性を持っているのである．[1] 小説だけに表現できるものがあると論じて，"in just this difficult border country where Dickens from Lawrence, making its [the novel's] own very varied demands, it has lived and lived with meaning."（*The English Novel* 190）と書いたウィリアムズが，ロレンスに至るまでの近代の経験と小説の変容の状況を"border country"と表現していることの意味は，ロレンスを読んだコードウェルの方法論を再検討し，歴史におけるロレンスの立場を捉え直す視座をえたわれわれには明らかである．小説の形式の臨界点に生成したロレンスのテクストは，作家自身の経験した歴史と認識の"border"がとった形式にほかならなかった．「連続性」がなければ"border"はない．そして，"border"で隔てられつつ連続している時空間を双方向に行き来するという歴史的かつ認識論的な経験の形式こそ，ロレンスのテクストが有する可能性そのものなのである．

## 註

本論は，科学研究費助成事業（若手研究B）による研究成果の一部であり，日本ロレンス協会第42回大会の若手シンポジウムで読まれた原稿に加筆・修正を加えたものである．

1　Jed Estyは，ニューレフトが「ナショナリスト」ともいえる領域にその議論を収斂させているとして，このことをとくにウィリアムズの名を挙げながら"epistemology of Englishness"と呼んでいるが（186），本論で見てきたウィリアムズのロレンス論における「認識論」が資本主義のグローバルな拡張とナショナルなものとの"border"にかかわるものであったことを考えるならば，ニューレフトによるロレンス評価という観点は，ニューレフト世代＝ナショナリズム的な小イングランド主義，というEstyの影響力の大きい議論を再考する契機になるであろう．これについては稿を改めて詳述したい．

## 引用文献

Booth, Howard J. "*The Rainbow*, British Marxist Criticism of the 1930s and Colonialism." *New D. H. Lawrence*. Ed. Howard J. Booth. Manchester: Manchester UP, 2009. 34-58.

Caudwell, Christopher. *Further Studies in a Dying Culture*. London: Bodley Head, 1950.

---. *Illusion and Reality: A Study of the Sources of Poetry.* New York: International Publishers, 1963.

---. *Romance and Realism: A Study in English Bourgeois Literature.* Princeton: Princeton UP, 1970.

---. *Studies in a Dying Culture*. London: Bodley Head, 1938.

Eagleton, Terry. *Criticism and Ideology: A Study in Marxist Literary Theory.* London: Verso, 1978.

---. *Exiles and Émigrés: Studies in Modern Literature*. London: Chatto, 1970.

Esty, Jed. *A Shrinking Island: Modernism and National Culture in England.* Princeton: Princeton UP, 2004.

Lawrence, D. H. "Democracy." *Phoenix: The Posthumous Papers of D. H. Lawrence.* Ed. Edward D. McDonald. New York: Viking, 1936. 699-718.

---. "Preface to *Touch and Go.*" *Phoenix II*: *Uncollected, Unpublished, and Other Prose Works*. Ed. Warren Roberts and Harry T. Moore. Harmondsworth: Penguin, 1978. 289-93.

Leavis, F. R. "'Under Which King, Bezonian?'" *Valuation in Criticism and Other Essays.* Ed. G. Singh. Cambridge: Cambridge UP, 1986.

Mulhern, Francis. "The Marxist Aesthetics of Christopher Caudwell." *New Left Review* 85 (1974): 77-87.

Said, Edward W. "Reflections on Exile." *Reflections on Exile and Other Essays.* Cambridge, MA: Harvard UP, 2000. 173-86.

Thompson, E. P. "Christopher Caudwell." *Socialist Register.* London: Merlin Press, 1977. 228-76.

Williams, Raymond. *Culture and Society 1780-1950*. New York: Harper, 1966.

---. *The English Novel from Dickens to Lawrence.* London: Chatto, 1970.

---. *Marxism and Literature.* Oxford: Oxford UP, 1977.

---. *Modern Tragedy.* Peterborough: Broadview Press, 2001.

# Epistemology of a "Border Country": From Christopher Caudwell to D. H. Lawrence

Yasuhiro Kondo

Christopher Caudwell conceives of Lawrence as one of the precursors who have a worldview of proletarian culture; yet he criticizes Lawrence for not ultimately overcoming bourgeois ideologies. Caudwell points out the peculiarity of the form of Lawrence's problematic novels. The change of literary forms in Lawrence's oeuvre is also emphasized by Raymond Williams, who argues that Lawrence's experience of industrial capitalism brings about significant problems "in the novel as a form."

Lawrence's expatriatism enables him to grasp the "distortion" that is, as Caudwell puts it, "not visible to those who still live within the framework" of capitalism, but forces him into an epistemological crisis that causes his novels to be written and interpreted in what Williams calls a "border country," whose border is conditioned by the writer's experience of capitalism and its global expansion. Caudwell's reading of Lawrence's works does not properly trace the "border," but the dialectical method adopted by the former implies the importance of at once historical and epistemological understanding of the form of the novel.

# 「島を愛した男」とD. H. ロレンスのコスモス

井出　達郎

## はじめに

D. H. ロレンス（D. H. Lawrence）が1927年に発表した短編「島を愛した男」（"The Man Who Loved Islands"）は，「島」というモチーフに対する特異な想像力を通して，ロレンス独自の宇宙論的ヴィジョン，彼が好んで使う表現でいえば，そのコスモロジカルなヴィジョンを具現化した作品として読むことができる．ふつう「島」という場所は，他から切り離された場所として，空間的に小さな点を連想させる．だがロレンスはこのモチーフに，そうした常識的な想像力とはそぐわない，無限という概念を結びつける．小さな点であるものを逆に無限なるものへと反転させるこの想像力に，「島」というモチーフをコスモスという大きな場へ接続させる，ロレンス独自の文学的達成をみることができる．

そもそもロレンスは，晩年の作品『アポカリプス』（*Apocalypse*）の中での壮大なコスモス論などにみられるように，一般的な「猥褻作家」という印象とは違い，われわれにとってこの世界とは何であるか，われわれはこの世界とどのような関係に立たねばならないか，といった宇宙論的な問題へ向かっていった作家だった．ロレンスの問題意識は，われわれが科学的な思考を発展させるあまり，この世界を単なる材料や分析の対象としてのみ扱うようになってしまったという近代の世界観に向けられている．ロレンスはそこに，かつて人間がもっていた「コスモスの根源的な生との直接的な触れ合い」（"New Mexico" 180-81）が欠けていると考えた．人間が失ってしまったコスモスとの直接的な関係を回復させること，それはロレンスの生涯のテーマのひとつだったのである．

だが，人間と世界が直接に結びついたコスモスとは，具体的にどういう状態をいうのか．この点について，エッセイや論文調の作品に散見されるロレンスの説

明は，しばしばふたつの極点のあいだを揺れ動いているようにみえる．一方で彼は，「一体性」，「真の関係性」，「生き生きとした有機的なつながり」といった表現を使い，人間と世界とがひとつであるという状態を目指しているようにみえる．これは特に，世界が死を素材として作られているという，ロレンス独特の世界観からきている．ロレンスにとってコスモスとは，「過去の諸個体の死んだ身体とエネルギーの総体にほかならない」(*Fantasia* 168)．しかしロレンスは，そうした世界との一体性に重きをおく一方で，その一体性を担っているひとつひとつの存在の個性の大切さを次のようにうったえる．「ひとつの魂，ひとつの個体は，死によって物質的成分へと変わってしまうことはない．死者の魂はいつまでも魂として存続し，その個としての性質を保ち続ける」(*Fantasia* 169)．ひとつの存在が世界と一体化すると同時に個であり続けること，ロレンスの目指す理想とすべきコスモスとは，このふたつの極点を同時に満たすものとして構想されている．この揺れ動きは，たとえば，「魂もまた同様に分解する——あるいは，分解しないこともある」(*Fantasia* 168) といった表現にみられるように，しばしば論理的に混乱した印象を与える．実際，ロレンスの論説的エッセイでは，ロレンスにおける「個」の考えを考察した浅井雅志が述べているように，ふたつの極点をめぐって，「あるときは一方が，またあるときは他方が真であると認識され，強く表現される」(98) という傾向がある．ロレンスの説明は，そのふたつがどのように彼の中で共存しているのかについて，一般の読者にわかりやすいものにはなっていない．

しかし，文学者としてのロレンスは，そのふたつの極点を含んだコスモス像を，文学的表現として昇華させるに足るモチーフを発見した．それが，「島を愛した男」における「島」である．島は他から切り離された場所である．だが，その切り離された状態の中にこそ，実は他とつながる契機が潜んでいる．ロレンスは，この作品の島というモチーフを通して，自身のコスモス像が抱えた論理的な困難を，文学的な表現によって昇華させる．

## 1.「アンチ・ユートピア物語」という解釈を超える要素——無限と卵

この作品は「アンチ・ユートピア物語」という解釈をよくされる．[1] 確かに話の大筋は，「自分だけの世界」というユートピア的な空想を抱いたがゆえに，破

滅に向かっていく男を描いているようにしかみえないだろう．島を愛し，島に「自分だけの世界」を作ろうとしたキャスカートという男が，結局はただ一人世界と切り離され，愛したはずの島もろとも大雪に埋もれていく．この暗い結末へと至る作品への解釈は，「ブルジョワ意識の崩壊」(John Turner)，「根本的な自己批判」(Mark Kinkead-Weekes)，といった意見にみられるように，概ね否定的なものである．[2]

しかし，こうしたわかりやすい読み方は，作品のもつ，アンチ・ユートピア物語という枠組みに収まりきれない決定的なふたつの要素を読み落としている．まずひとつは，物語の中心となる島というモチーフに，無限という概念が結びつけられている点である．作品をアンチ・ユートピア物語とする読み方からすれば，島はごく単純に，他から切り離されているという状態の，ネガティブな意味での象徴でしかないだろう．しかし，すでに物語の冒頭において，まったく違う意味合いがこのモチーフに与えられている．語り手は読者にむけて，島という場所にいるときに，その空間的に小さな場所が，奇妙にも，「暗闇のように無限で古い宇宙」(152) といった感覚や，「別の無限」(153) といった感覚を生じさせることがあるという．この無限の感覚との結びつきは，物語にとって島という場所が，単に「切り離された状態」という設定だけに収まるのではないことを示している．

もうひとつは，島が卵に結びつけられている点である．作品をアンチ・ユートピア物語とする読み方からすれば，島とは単に主人公の墓場であり，ただ死のみと結びついた場所にみえる．しかし，この点においてもまた，まるで逆の意味合いである「生」や「誕生」を連想させる「卵」という比喩が提示されている．語り手は，島を「ただひとつの卵を温める巣」(151) と喩え，主人公こそがその卵にほかならないと述べる．実際，この奇妙な喩えは，物語の最後に反復されることになる．最後に大雪によってすっぽりと包まれる島は，その情景だけをみれば，白い色と小さな丸という形象によって，容易に卵を連想させるものになっている．[3] 島が死を予感させるまさにそのときに卵に変わることは，その場所がただ死のみと結びついているだけではないことを仄めかしている．

このふたつの要素は，単にアンチ・ユートピア物語という枠組みからはみ出しているというだけではない．それぞれがともに，ロレンスの考える理想のコスモ

スの在り方に密接に関連している．切り離されながら無限と結びつくという考えは，個でありながら全体がひとつであるというコスモス像と共鳴し，また死が新しい生を仄めかすという筋書きは，コスモスとは死を素材にしているという信念に合致する．ここに，この作品の読解において，ロレンスのコスモスという文脈が要請される理由がある．

## 2. "isolate"されていない"island"——島と海の可逆性

一般的な読み方からすれば，島というモチーフを無限や卵に結びつけるのは，きわめて恣意的であり，まったく必然性を欠いたものに思えるかもしれない．しかし物語は，島がそのように特徴づけられるのは，単なる作者の気まぐれでは決してなく，島という場所にとって必然的であるという決定的な理由を示していく．物語が示すその決定的な理由とは，島という場所が，ただ「切り離されている」だけではなく，無限や卵とかかわりの深い場所，すなわち，海という場所と常に「接している」，というものである．さらに物語が描いていくのは，島と海とが単に接触しているというだけでなく，両者は常に反転の可能性をはらんでいること，すなわち，島と海とが可逆的であるということである．島とは何よりも海と接している場所であり，さらに，いつでも海に変わりうる存在であること，この独特の空間感覚が，無限や卵というふたつの要素と密接に絡んでいくことになる．

島と海との結びつきは，冒頭から示されている．語り手は，島を無限という観念に結びつける箇所において，はっきりと「海」という語を差し込んでくる．

> Then in the night, when the wind left off blowing in great gusts and volleys, as at sea, you felt that your island was a universe, infinite and old as the darkness. (152)

この冒頭部において，これから始まる物語が，「島」だけでなく，実のところ「海」に関するものでもあることが予告されている．

物語が海に関するものでもあるという読み方は，一見すると，「島を愛した男」という題名と矛盾すると感じられるかもしれない．だが実は，題名で使われてい

る英語の"island"という語は，それだけで海という場所に深く結びついている．現代英語の"island"は，確かに"isolation"や"insulation"という，「隔絶」や「孤立」という意味のみを連想させる．しかし，この語の前身である古英語の"igland"は，「水」を意味する接頭辞"ig"と，「土」を意味する"land"から成り立っており，その文字通りの意味は，"water-land,"すなわち，「水の土地」だったのである．[4] この点からすると，この"island"に関する物語を，周囲にある水，すなわち海を含めた物語とすることは，実は語のもともとの意味と合致する．

このように島と海とを重ね合わせたうえで疑問となるのが，ではなぜそのふたつが無限という概念と結びつくのか，という点である．たしかに海は，その地形のイメージから，空間的な無限の広がりを思い起こさせる．しかし，島／海に結びつけられるのは，そうした空間的な無限ではない．それは，時間的な無限である．語り手は，第一の島について，そこでは過去，現在，未来がすべて共存していると述べる．

> Strangely, from your little island in space, you were gone forth into the dark, great realms of time, where all the souls that never die veer and swoop on their vast, strange errands. The little earthly island has dwindled, like a jumping-off place, into nothingness, for you have jumped off, you know not how, into the dark wide mystery of time, where the past is vastly alive, and the future is not separated off. (152)

そして語り手は，第一の島の描写から島一般の定義のような説明へと移行しつつ，この過去，現在，未来がすべて一緒になって共存しているという考えを，次の言葉に自然とつなげていく．「死んだものの魂はみな甦り，われわれの周囲に生き生きと脈打っている」(153)．過ぎ去ったものと来るべきものとが「切り離されず」に共存する時間の感覚においては，死と生がたえず入れ替わるのはごく自然なことだろう．このように，この物語における無限とは，何よりも時間的な無限にほかならず，死と生とが絶えず反転する永遠として描かれている．

だが，依然として疑問は残る．なぜ島／海が時間的な無限と結びつくのか，なぜ海が死と生とが反転する場所になるのか，語り手が単にそうなると断定しただ

けでは，その理由は何もわからない．この島／海と時間的な無限の関係について，ミルチャ・エリアーデ（Mircea Eliade）の水のシンボリズムに関する議論は，極めて有益な視点を提示している．

> 水は可能性の総体を象徴する．それは一切の存在可能性の源泉（fons et origo）であり，貯蔵タンクである．すなわち水はあらゆる形態に先立ち，あらゆる創造をになう．創造の一つの原型は，大水の中に突如＜顕現する＞島である．逆に水中に沈むことは無形態への回帰，存在以前の未分の状態へ戻ることを象徴する．浮上は宇宙創造の形成行為を再現し，水没は形態の分解を意味する．それゆえ水の象徴は死及び再生を含む．(121)

水とは，存在のすべての可能性にとって，ある個体の創造をうながす．そして同時に，それを分解させる．それゆえ，生と死の両方のシンボルとなりうる．そうエリアーデは主張している．引用文で示唆的なのは，そうした創造／分解，生／死の典型的な例として，「島」が挙げられていることである．実際にエリアーデの考察は，残っていた疑問，すなわち，島が水＝海と結びつきながら，なぜ死と生とが反転する場所になるのかという疑問への，説得力のある解答になっている．

ここで注目すべきは，エリアーデの論じている水が，島という存在にとって，その存在の溶解をもたらす一種の脅威としてとらえられている点である．ロレンスの物語でもまた，島と海との関係が同じように描かれる．最初の島で主人公が感じる奇妙な感覚について，語り手は次のように述べる．「ちょうど足場を波にさらわれて海のなかに入ってゆかなければならなくなった男のように，彼も夜が来ると，不死の時間の世界に押し出されてしまうのだった」(153)．この最初の島ですでに，島という足場は，海によって消される危険と常に隣り合わせにあることが予感されている．

この海の脅威は，第二の島においてより明確になる．「島の裾の岩のあいだでケルトの海が，壊れそうな灰色の岩肌をのみ込み，洗い流し，強打していた」(161)．海はもはや，島というモチーフに対して，単なる背景ではなくなり始める．海は，壊れそうな島の存在をのみ込んでしまおうとさえしている．[5] さらに，

この第二の島になると，海のイメージは主人公の内面にまで侵食してくる．「彼の精神は水面から微光の差し込む洞穴のようだった．そこには不思議な海草がほとんど揺れもせずに水中にひろがり，もの言わぬ魚が影のようにひっそりと出入りしている」(163)．魚が自由に内と外とを通行できる状態とは，彼の内面世界がもはや敷居をもっていないことを示しているだろう．島が海という背景に分解していくように，彼の内面世界もまた，海のイメージの中で，はっきりした境界線を失っていく．島も，そして主人公の内面も，海によって存在以前の未分の状態へと促されていくのである．

キャスカートが第三の島へ移ると，島と海の可逆性は最高度に達する．それはまず，島と海の描写の量の差にはっきりとあらわれている．第一の島では，どのような動物や植物がいるのか，ある箇所を歩くのにどのくらいの時間がかかるのか，主人公の共同生活者たちは毎日どのような生活を送っているのか，島の風景が事細かに描かれていた．それがこの第三の島になると，島に対するその種の描写はほとんどなくなってしまう．そもそもそこには木一本生えておらず，描写するに値するものがほとんどないのである．そのかわりに語り手が伝えるのは，主人公が海を見つめる姿である．「彼は自分の島の低い丘の上に座って海を見ているのが好きだった——何もない青白い静かな海を」(167)．海はもはや物語の背景であるのをやめ，あたかも中心的なモチーフかのごとく前面にせり出してくる．「ただ彼はいまでも，自分がひとりであることに，自分のなかにしみこんでくる空間とともに，完全にひとりであることに，ただ一つの満足を見出していた．ただ灰色の海があり，波が打ち寄せる島が足場としてあるだけだった」(170)．“island”のもともとの意味である“water-land”を想起させるかのように，「島を愛する男」はもはや，「海を愛する男」といってもいい段階に達する．

結末における吹雪の場面は，この島と海の可逆性を，白と黒の色のコントラストによって際立たせている．ある冬の朝，キャスカートが目を覚ますと，島は雪の白一色に覆われていた．そして，島とは対照的に，海は黒く濁っていた．「暗い鉛色の海に囲まれた島は真っ白になっていた．黒い岩には奇妙に白い斑点がこびりついていた．海の泡はもはや正常さを失い，汚く見えた」(171)．島は黒から白へと変わり，海は白から黒へと変わる．このコントラストが，冒頭から提示されてきた島と海の可逆性を鮮明に強調する．

さて，ここまでの議論だけに限れば，物語で描かれているのは，島が海によって一方的にのみ込まれていく過程，島という存在が分解されていく過程だけのように思える．そこには，エリアーデの考察にあった死および再生の象徴のうちの，死の側面だけしかないようにみえる．しかし，死へ向かっていくというまさにその点において，物語は，エリアーデが述べていたもう一つの側面，すなわち，再生の側面を示していくことになる．そもそもこの物語の島という場所では，死に特別な意味が与えられていた．島においては，無限の時間の中で，「死者の魂はみな甦り，われわれの周囲で生き生きと脈うっている」(153) のだった．その意味で，この物語の島という場所にとっての死は，決して終わりを意味していない．死を予感させる結末は，物語の冒頭で与えられた特別な死の意味とともに，新しい生の可能性へと接続される．

結末部の細部は，この再生の可能性を潜ませている．まず，すでに指摘したように，最後に雪によって覆われる島は，その色と形から，容易に卵を連想させる．主人公が死ぬまさにその瞬間，島という場所が，誕生の象徴ともいうべき卵に変わるのである．

ここで重要な点は，物語全体を貫く時間の循環性である．豊国孝がすでに指摘しているように，この物語には，「線的な時間あるいは合理的な時間とは対照的な，永遠回帰する循環的な時間あるいは神話的な時間」(Toyokuni 78) が強調されている．それが仄かに暗示されているのは，最初の島における四季の変化についての描写である．語り手は，季節ごとの風景の変化を，春，夏，秋，冬と，順番に描写していく．ここで重要なのは，その順番に述べるという描写の中に，春から始まり冬に終わるという線的な構造ではなく，最後の冬が再び春へと循環する構造を示唆するものが含まれている点である．語り手は春についての次のように描写する．「春さきになると，小道や林のあいだの空き地は，サンザシの白い花 (a snow of blackthorn) でおおわれたようになった」(152)．この文だけを取り出してみれば，ここで使われている“snow”という語は，サンザシの「白」を表わしていると解するのがごく自然である．しかし，この物語が島という場所に与えていた特別な意味合い，すなわち，過去や未来と切り離されていない時間的な無限と結びつく場所であることをふまえた場合，“snow”という語がもつ時間的

な意味合いを無視することはできないだろう．春の描写にあえて「雪」という冬の語を交えていること，そこからは，描写を冬で終わらせなければならないという語りの制約を越えて，冬という終点と春という始点のつながりを暗示させたいという語り手の意識を感じさせる．

この循環的な時間，特に季節をめぐる循環的な時間は，最後の場面において再び前景化される．大雪が吹き荒れる場面，季節はもちろん冬である．渡り鳥も飛び去ってしまった中で，その冬の情景は，物語の最後であると同時に，すべての存在の最終地点であるという印象を与える．しかしキャスカートは，雪に覆われた丘にのぼり，太陽のつかの間の熱を感じながら，そうした印象にまるでそぐわない，「夏だ」「木の葉の季節だ」(173) という言葉を発する．大雪の中で発せられる「夏」という言葉，すなわち「冬」と「反対」の言葉は，物語の季節についての意識を考慮に入れれば，単に極限状態の中で気がふれてしまったという単純なものでは決してないだろう．その時点での冬という季節が反対の夏へと反転すること，少なくとも，冬が最終地点ではないことを暗示している．

結びの風景描写は決定的に重要である．「遠いかなたから，不満げな雷のつぶやきが聞こえてきた．彼はそれが海上に乱舞する雪のしるしであることをしっていた (he knew it was the signal of the snow rolling over the sea)」(173)．この文で見逃せないのは，“roll over”という語がもつニュアンスである．文脈からみれば，それはくるくると回って海におちる雪を意味していると読める．しかし，文脈上の自然な意味の一方で，この語には「反転させる」という意味がある．雪が海を反転させるというイメージは，それだけでは意味をなさない．だが，この場面における雪と海が，白と黒との鮮明なコントラストで関係づけられていたことは，そこに“roll over”の別の意味とのかかわりを感じさせる．物語全体を貫く循環する時間への意識も含めて，その別の意味は，この時点での黒い海／白い島という関係の反転を暗示するものになる．実際に海は，今や白くなった島に対して，今度はその「白であるという状態」を早速脅かし始めている．「そして海は，死体のような島の白さを食い荒らしていた」(171)．最後にキャスカートが聞くしるしとは，今は黒い海が再び白く反転するしるし，海と島との関係が反転するしるしにほかならない．それは，海が島という存在を分解するのとは別のもうひとつの方向，すなわち，島が新しく生成する方向の予感となっている．

こうして島と海との関係は，一方的ではなく，双方向的な可逆性をそなえたものになる．その関係の中で，島という場所は，切り離されていながらも無限という概念と触れ合う場所，そしてまた，死がそのまま生へとつながっていく場所になっている．それは，ロレンスが理想としたコスモスの内実を，具体的な形象でもってあらわしている．

## 結びに

ロレンス自身はこの作品に対して，「『島を愛した男』には哲学があり，極めて重要なものがある」と述べている．[6] ロレンスのコスモスという視点からの読解は，その「哲学」や「重要なもの」の一旦を照らし出すだろう．ロレンスのコスモスの哲学は，論理的に説明を与えようとすれば，理論家としてのロレンスが陥ったように，ふたつの極点に引き裂かれざるをえないものである．しかし，文学者としてのロレンスは，ふたつの極点を島というモチーフに託すことで，自らの哲学を文学の表現として結晶させた．島は，海という場所との可逆的な関係の中で，切り離されながら無限と触れ合っている場所，死が生へと反転し続ける場所として，ロレンスのコスモスへとつながっていく．

＊本稿は，2010年10月第55回日本英文学会北海道支部大会で行った口頭発表を大幅に加筆・修正したものである．

## 註

1　この種の解釈の先行研究については，竹岡千代が的確にまとめている．竹岡千代，「D. H. ロレンス『島を愛した男』試論——ユートピアの限界」，pp.39-40を参照．

2　否定的な批評が多くを占める中で，エコクリティシズムの観点から物語に潜む再生の契機を見出す田部井世志子のように，作品に積極的な意味を読み込もうとする議論もある．本稿は，別の側面から，そうした積極的な意味を読み込もうとする試みのひとつである．

3　結末で島が卵を連想させる点は，ベン・シュトルツファス（Ben Stoltzfus）の指

摘がある．Ben Stoltzfus,"'The Man Who Loved Islands': A Lacanian Reading,"p.28を参照.

4　現代英語の"island"は，15世紀に古英語の"igland"がフランス語の"isle"と混同されたことにより，「水」を意味する接頭辞"ig"が抜け落ちたかたちで広まった．*The Oxford English Dictionary*の"island"の項目を参照.

5「のみ込む」("suck")という強い語について，デイヴィッド・ウィルバーン(David Willbern)は，この作品に「簒奪し，破壊する口部」のイメージが散見されると指摘している．David Willbern,"Malice in Paradise: Isolation and Projection in 'The Man Who Loved Islands,'" p.227を参照.

6　Mark Kinkead-Weekes, "A Lawrence Who Had Loved Islands,"pp.187-88を参照.

## 引用文献

浅井雅志『モダンの「おそれ」と「おののき」——近代の宿痾の診断と処方』松柏社，2011.

エリアーデ，ミルチャ『聖と俗——宗教的なるものの本質について』風間敏夫訳，法政大学出版局，1969.

"Island." *The Oxford English Dictionary*. 2nd ed. 1989.

Kinkead-Weekes, Mark. "A Lawrence Who Had Loved Islands." *D. H. Lawrence and Literary Genres*. Ed. Simonetta De Filippis and Nick Ceramella. Loffredo: Napoli, 2004. 187-94.

Lawrence, D. H. *Fantasia of the Unconscious and Psychoanalysis and the Unconscious*. 1922 and 1923. Cambridge: Cambridge UP, 2004.

---. "The Man Who Loved Islands." 1927. *The Woman Who Rode Away and Other Stories*. Cambridge: Cambridge UP, 1995. 151-73.

---. "New Mexico." 1928. *Mornings in Mexico and Other Essays*. Cambridge: Cambridge UP, 2009. 173-81.

Stoltzfus, Ben. "'The Man Who Loved Islands' : A Lacanian Reading." *D. H. Lawrence Review* 29. 3 (2000): 27-38.

Tabei, Yoshiko. "An Ecological Interpretation of 'The Man Who Loved Islands.'" *D. H.*

*Lawrence: Literature, History, Culture.* Ed. Michael Bell, Keith Cushman, Takeo Iida and Hiro Tateishi. Tokyo: Kokusho-Kanko Kai P, 2005. 433-53.

竹岡千代「D. H. ロレンス『島を愛した男』試論——ユートピアの限界」,『山村女子短期大学紀要』4 (1992): 39-52.

Toyokuni, Takashi. "A Modern Man Obsessed by Time: A Note on 'The Man Who Loved Islands.'" *D. H. Lawrence Review* 7 (1974): 78-82.

Turner, John. "The Capacity to Be Alone and Its Failure in D. H. Lawrence's 'The Man Who Loved Islands.'" *D. H. Lawrence Review* 16. 3 (1983): 259-89.

Willbern, David. "Malice in Paradise: Isolation and Projection in 'The Man Who Loved Islands.'" *D. H. Lawrence Review* 10 (1977): 223-41.

# "The Man Who Loved Islands" and D. H. Lawrence's Cosmos

Tatsuro Ide

D. H. Lawrence's 1927 short story "The Man Who Loved Islands" can be read as a work to embody his cosmological vision through his unique imagination for its central motif "islands." Islands usually evoke only an image of a small point in space which is "isolated" from other places, but the story links this motif with the notion of infinity which can make islands "connected" with a large place like the universe. In this sense, islands are conceived as a place for both isolation and connection. The story involves this characteristic place especially by revealing a hidden aspect of islands: their reversible relation with the sea. This imagination for the motif corresponds exactly to Lawrence's lifelong idea of the cosmos, which was explored through his career as an alternative to the modern scientific view of the world. Islands in the story are a literary embodiment of his ideal cosmos that can hold both individuality and unity, symbolized in the unique spatial condition of isolation and connection.

# A British Canadian Soldier and a War Bride in "The Fox"

Tomohiro Yamamoto

## Introduction

Some characters in D. H. Lawrence's novels and short stories aspire to live in Canada as their place of emigration or refuge. Some examples include the Saxtons in *The White Peacock* (1911), Alfred and Louisa in "The Daughters of the Vicar" (1914) and Geoffrey and Lydia in "Love among the Haystacks" (1930). Siegmund in *The Trespasser* (1912) dreams of farming in Canada when he can't resolve the conflicting pressures of his sense of duty to his family and his love for Helena (181). Even Connie in *Lady Chatterley's Lover* (1928) expects to go to British Columbia so that she and Mellors will not be smeared with a scandal (282).

"The Fox" (1923) is also included in this list because Henry wishes to live in Canada with March after they are married. However, there are two significant differences in this situation from the works mentioned above. First, Henry has already experienced a Canadian life. He has lived in Canada and now comes back to England and visits Bailey Farm where he lived with his grandfather in his youth. The second difference is that "The Fox" reflects historical and social backdrops concerning British Canadian soldiers and their (post) war brides emigrating to Canada.[1]

These Canadian elements in "The Fox," however, have attracted little attention from critics, and a few interpret the Canadian factors merely as symbolic phrases: "a utopia of the self outside England" (Wussow 135), "a symbolic geography of wilderness" (Ruderman 81). Canadian settings have been treated as trivial or marginal situations in "The Fox," but as the text contains two social phenomena concerning Canada, it is worth examining this novella within the scope of these Canadian factors.

This paper demonstrates the effects that "The Fox" achieves by incorporating these phenomena.

## 1. A British Canadian Soldier

"The Fox" is set in England in late 1918, when the First World War has just ended. We see in this novella some words or phrases that have close connections to the war: "Daylight Saving Bill," which came into effect during the war; "Salonika," one of the famous battlefields in Greece; shortage of food in 1918; and "bobbed hair," a short hair style convenient for women engaged in war work.

Henry is cast as a British Canadian soldier, which is also one aspect of the war. When Henry meets Banford and March at Bailey Farm for the first time, he gives an outline of his background. The reason he leaves for Canada is explained briefly in the following quote:

> When he was twelve years old he had come to Bailey Farm with his grandfather, with whom he had never agreed well. So he had run away to Canada, and worked far away in the West. (17)

The description of the western part of Canada reflects the state of affairs at that time, since this area was one of the most populated and popular industrial grounds for the British people emigrating to Canada (Peterson 57-69). Judging from his age ("not be more than twenty") and his statement that he lived at Bailey Farm five years earlier (14), it is certain that he went to live in Canada just before the outbreak of the war when emigration to Canada from England had reached its peak (Appadurai 72, Hoerder 110).

After the war breaks out Henry enlists the military, which is also in accord with the wartime background of that era. Canada sent about 600,000 soldiers to the European Continent and nearly half the Canadian forces were British-born (Buckner and Francis 2). What was the motive or reason for British Canadians such as Henry to join the army, then? Considering the circumstances in wartime, we find two elements

that can account for their enlistment. One is their feeling of support, enthusiasm and/or patriotism for their motherland (Bothwell 55, Coates 33-4)[2], while the other is the introduction of the conscription system in 1917.[3]

These same reasons could support Henry's decision to join the army. However, we need to determine the precise period of his enlistment to judge his motive because, roughly speaking, the former case applies to the first two years of the war, and the latter to the last two years. "The Fox," however, does not give us decisive evidence: "... I joined up in Canada, and I hadn't heard for three or four years" (15). In a sense, the text successfully overlooks this issue by having Henry state that he fought in Salonika (15) which is one of the famous battlefields of the war. The Allied expedition developed operations in this Greek port town and soldiers experienced a prolonged battle from October 1915 to the end of the war,[4] which means that both voluntary and compulsory British Canadian enlistees were present.

The period of his enlistment is obscure, as is his affection toward his motherland. He displays mixed feelings toward England in the text. For instance, after Henry asks March to marry him, having been roused by the idea to possess Bailey Farm and marry March, he thinks to himself, "one could live easily enough here" (34). He seems to have a forward-looking view toward England at this point. It is after he meets Banford's antagonism regarding his marriage to March that he expresses his negative feelings toward England. During his sleepless night, just after Banford showed her absolute disagreement for his idea of marriage, he patrols Bailey Farm with a gun. Something in his mind changes, as follows:

> And suddenly, it seemed to him England was little and tight, he felt the landscape was constricted even in the dark, ... (38)

Henry, in his soldierly thinking, considers his plan to marry March as "a slow, subtle battle" (24). It is shortly after his change of mind that he kills the fox. He carefully aims at the animal by bringing "the gun to his shoulder" (39). We should notice that Henry, who expresses a sense of revulsion toward firearms ("'We've seen

enough of rifles."') (15) and does not hold the gun under his arm but "in his arms" (23), an unusual manner for a soldier who is accustomed to handling firearms (Tomiyama 171), shoots the fox like a sniper does his enemy. With the outbreak of his personal war with Banford, his nature as a soldier is completely recalled to his mind, and his motherland turns into a battlefield.

From then on, words or idioms relating to the war appear sparsely: "She [March] had got into league with Banford against him." (44); "a miss-fire sarcasm" (46); "If only she [March] could sleep in his shelter" (56) (underlines mine). After his feelings toward England change, he declares his desire to take March back to Canada after their marriage. In the end, he feels he is longing to leave "England which he so hated" (70).

It is noteworthy that Banford looks like an evil creature to Henry after they become hostile toward each other.

> . . . in the sitting-room, there, crouched by the fire like a queer little witch, was Banford. She looked round with reddened eyes as they [Henry and March] entered, but did not rise. He thought she looked frightening, unnatural, crouching there and looking round at them. Evil he thought her look was, and he crossed his fingers. (55)

Using this description of Banford as a beachhead, some critics interpret her role in terms of allegory.[5] In fact, expressions such as "a queer little witch," "reddened eyes," "unnatural," "Evil" do induce allegorical readings. However, we must recall Henry's career as a soldier again, especially the countries he mentions as his locations just before coming to England: Greece (Salonika) and France (15). The latter is particularly significant because France is the country where "[w]ith a historic animosity toward Germany, from the beginning of the war French priests easily cast the enemy as the devil incarnate" (Roberts 1518, underlines mine). Here we find another interpretation of Banford's depiction as a supernatural being, one generated from Henry's experience as a soldier.

Henry exhibits his resentment toward Banford most intensely when he reads the letter from March refusing to marry him. Sensing Banford's interference within the letter, he sees Banford as a thorn to get out of his life (59). Notably, he receives the letter when he returns to the camp where he is surrounded by other soldiers and officers. This situation works to reawaken Henry's identity as a soldier. He instantly requests and is granted leave by his superior and returns to Bailey Farm. There, he kills Banford by felling a tree with unerring accuracy, which is described as "crack Canadian tree felling" (65). Though he feels some pain in his heart, whether from his sense of guilt or not, pleasure gradually prevails over that feeling: ". . .among all the torture of the scene, the torture of his own heart and bowels, he was glad, he had won" (66). Henry equalizes the murder of Banford with killing the enemy on the battlefield. For Henry, the death of Banford is similar to winning a battle (Singh 137) or, to put it mildly, her death is collateral damage in accomplishing his plan of operations.[6]

What enables Henry to change his mind: his sense of re-entering warfare and his hatred for England? The key element concerning the former change is, of course, his recent experience as a soldier, while the latter change is explained by his long absence from England (about five years) after his emigration to Canada. We should recall again that Bailey Farm, England, changes its landscape and becomes a battleground after he begins to regard Banford as his enemy. For him, England changes into one of the countries where he should execute his mission as a soldier. This change, from the motherland to the battlefield, doesn't matter to him because, whatever may happen, he has a place to return: Canada.

## 2. A War Bride Emigrating to Canada

Another Canadian factor in "The Fox" first appears in a conversation about the marriage of Henry and March. After Henry declares his wish to marry March and take her to Canada with him, Banford asks:

"You are quite ready, are you, to go to Canada? Are you, Nellie?" asked Banford.

March looked up again. She let her shoulders go slack, and let her hand that held the needle lie loose in her lap.

"It depends entirely on *how* I'm going," she said. "I don't think I want to go jammed up in the steerage, as a soldier's wife. I'm afraid I'm not used to that way." (43-4)

March's answer echoes one of the phenomena during and after the war: war brides who marry foreign soldiers and emigrate to their countries. It is calculated that by war's end, Canadian soldiers were marrying British and European women at the rate of 300 per week, over 1,000 per month. A large number of Canadian Expeditionary Force soldiers married abroad and returned to Canada with war brides, sometimes also with children. It is difficult to ascertain exactly how many women went to Canada as war brides during wartime. Reports in the Canadian press estimate that, by November 1918, at least 20,000 women were new residents in Canada, and that the number swelled to 35,000 by August 1919.

In this quote, March is worried about the voyage to Canada and her concern mirrors the situation surrounding war brides at that time. With a shortage of ships after the war, war brides were placed on any ship that had space available. The voyage across the Atlantic Ocean to Canada took seven days on an average, and a number of passengers were reported to suffer for the duration of the trip. Moreover, the greatest risk of travelling to Canada during the winter of 1918 and 1919, which is in accord with the setting of "The Fox," was the Spanish flu epidemic, which is also described in this novella(19, 21). Tragically, many war brides perished while on their voyage or shortly after arriving on Canadian shores because of this worldwide influenza pandemic.[7]

March's answer includes a direct reference to the circumstances of war brides' at the time. Judging from the general cases of war brides— encounters with their future husbands while they are hospitalized or on leave, and emigration to their countries,— the case of March also fits with one of the examples of war brides. But we should notice a significant difference from the typical cases of war brides. Romances in

wartime inevitably occur *outside* of the battlefield. Nonetheless, Henry thinks of the process of convincing March to marry him as "a slow, subtle battle"(24), and in his consciousness, Bailey Farm changes into a battlefield, as discussed in the previous section. Their romance, then, is described as occurring *inside* a battlefield. Furthermore, if we refer to one of the typical war bride cases of a British woman marrying a Canadian soldier, as given below, we see another significant difference in the case of Henry and March.

> It was at a hospital in London, in 1918, when grandpa was nursed back to health by the young Lucy Whatmore, a nurse form Sutton Coldfield in the English midlands. Quickly falling in love, they married after only a few months, in the spring of 1918. (Monette 30)

As stated by Melynda Jarratt, who specializes in research on war brides, the stories of war brides are filled with passionate love and the strong, spontaneous will of women who "chose to follow love and begin a new chapter in their lives in Canada" (14). In contrast to these examples, March writes in her letter to Henry that "I don't see on what grounds I am going to marry you. I know I am not head over heals in love with you, . . ."(57). Henry, on other hand, after marrying March, deprives her of her will to "exert her love towards him"(67). He suppresses the most inevitable emotion for almost all war brides who begin their new lives far from their countries. What remains is a one-sided power relationship in which Henry is the master.

> . . . though she belonged to him, though she lived in his shadow, as if she could not be away from him, she was not happy. She did not want to leave him: and yet she did not feel free with him. Everything around her seemed to watch her, seemed to press on her. He had won her, he had her with him, she was his wife. And she—she belonged to him, she knew it. But she was not glad. And he was still foiled. He realised that though he was married to her and possessed her in every possible way, apparently, and though she *wanted* him to possess her, she

wanted it, she wanted nothing else, now, still he did not quite succeed. (67)

Here, March declares her desire to be possessed by Henry. She casts off her spontaneity and surrenders it to her spouse, which forms a striking contrast to the typical mindset of war brides. She becomes what Julian Moynahan calls a "captive bride" (198). She does not become a war bride but a captive war bride in the strict sense, because she has to "be passive, to acquiesce, and to be submerged under the surface of love" (67).

Henry's state of mind is also different from the usual case of war bridegrooms. He does not promote March's independence after he wins the battle over his bride; rather he imprisons her in his own cage and hopes vaguely, without any assured reason, that things will get better once they arrive in Canada (71). He wins March as "his reward" (59) but his post-war situation is tragic because, though he is on the winning side and receives a war trophy, he still does not quite succeed, as described in the quotation above.

## Conclusion

"The Fox" reproduces the war situation in post-war England by featuring Henry, who has been outside of his motherland for several years. With his character, the text comes to include two factors concerning Canada: British Canadian soldiers and war brides. However, the text does not weave their essential elements into the story. In the former case, Henry finally rejects his love of his native land. In the latter case, neither Henry nor March feels mutual or spontaneous love. Rather "The Fox" emphasizes hatred for the motherland and denial of love, which are exactly the opposite of the feelings these two phenomena typically contain or evoke. By this maneuver, however, "The Fox" succeeds in epitomizing the futility of the war, even if one is on the victorious side, since the feeling that remains with Henry and March is only helplessness. Further, in Henry's case, the situation is more tragic: even though he wins these two wars in a row (the First World War and his war over March), he feels frustrated. He consoles himself with the thought of returning to Canada where

he can entertain a flicker of hope.

## Notes

1 In this respect,"Hadrian"/ "You Touched Me" (1920) also includes those historical background. On comparison of this story and "The Fox", see Harris 151-3; Leavis 304-20; and Pritchard 110, 140.

2 As a matter of course, not all British Canadians made voluntary enlistments from patriotism. For instance, one British Canadian joined up to "retain his self-respect" (Hoerder 110).

3 On the process of enforcing the conscription system, see Brown and MacKenzie 64-5 and Taucar 47.

4 See Lawrence, *The Fox, The Captain's Doll, The Ladybird*, "Explanatory Notes" 239-40.

5 For example, see Tetsumura and Whelan.

6 On major interpretaions of Henry's murder of Banford, see Moynahan 199; Daleski 154-55 and Ruderman 56. On recent interpretations, see Granofsky's Darwinian reading (54) and Watkins's view from the notion of masculinity (302).

7 On circumstances surrounding war brides emigrating to Canada, see Fulford and Jarratt 255-68.

## Works Cited

Appadurai, Samy. *Canada: The Meat of the World Sandwich*. Bloomington: AuthorHouse, 2009.

Bothwell, Robert. *Canada and Québec: One Country, Two Histories*. Vancouver: U of British Columbia Press, 1998.

Brown, Robert and David Clark MacKenzie. *Canada and the First World War: Essays in Honour of Robert Craig Brown*. Toronto: U of Toronto P, 2005.

Buckner, Philip Alfred and R. Douglas Francis. *Canada and the British World: Culture, Migration, and Identity*. Vancouver: U of British Columbia Press, 2006

Coates, Colin MacMillan. *Majesty in Canada: Essays on the Role of Royalty.* Toronto: Dundurn Press, 2006.

Daleski, H. M. "Aphrodite of the Foam and *The Ladybird* Tales." *D. H. Lawrence: A Critical Study of the Major Novels and Other Writings.* Ed. A. H. Gomme. Sussex: The Harvester Press, 1978. 142-58.

Fulford, Annette. "Canadian War Brides of the First World War." Web. 3 February 2008 and 27 February 2008. 〈http://ww1warbrides.blogspot.com/〉.

Granofsky, Ronald. *D. H. Lawrence and Survival: Darwinism in the Fiction of the Transitional Period.* Montréal: McGill-Queen's UP, 2003.

Harris, Janice Hubbard. *The Short Fiction of D. H. Lawrence.* New Brunswick: Rutgerts UP, 1984.

Hoerder, Dirk. *Creating Societies: Immigrant Lives in Canada.* Montréal: McGill-Queen's Press, 1999.

Jarratt, Melynda. *War Brides: The Stories of the Women Who Left Everything Behind to Follow the Men They Loved.* Toronto: Dundurn Press, 2009.

Lawrence, D. H. *Lady Chatterley's Lover.* 1928. Ed. Michael Squires. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

——. *The Fox, The Captain's Doll, The Ladybird.* 1923. Ed. Dieter Mehl. Cambridge: Cambridge UP, 2002.

——. *The Trespasser.* 1912. Ed. Elizabeth Mansfield. Cambridge: Cambridge UP, 1981.

Leavis, F. R. *D. H. Lawrence: Novelist.* 1955. Harmondsworth: Penguin Books, 1994.

Monette, Rod. *Road Worthy.* Victoria: Trafford Publishing, 2008.

Moynahan, Julian. *The Deed of Life: The Novels and Tales of D. H. Lawrence.* Princeton: Princeton UP, 1963.

Peterson, Donald. G. *British Direct Investment in Canada 1890-1914.* Toronto: U of Toronto P, 1976.

Pritchard, R. E. *D. H. Lawrence: Body of Darkness.* London: Hutchinson University Library, 1971.

Roberts, Priscilla Mary. *World War I: A Student Encyclopedia.* Santa Barbara: ABC-

CLIO, 2005.

Ruderman, Judith. *D. H. Lawrence and the Devouring Mother: The Search for a Patriarchal Ideal of Leadership.* Durham, N. C.: Duke UP, 1984.

Singh, A. K. "War and Lawrence: A Study of his Short Story *The Fox.*" *Essays on D. H. Lawrence.* Ed. T. R. Sharma. Meerut: Shalabh Book House, 1987. 134-38.

Taucar, Christopher Edward. *Canadian Federalism and Quebec Sovereignty.* New York: Peter Lang, 2002.

Tetsumura, Haruo. "Aru <Nemurihime> Baajyon to Shiteno *Kitsune.*" Ed. Tomiyama Takao and Tateishi Hiromichi. *D. H. Lawrence Kitsune to Tekisuto.* Tokyo: Kokusho Kankou Kai, 1994. 87-105.

Tomiyama, Takao. "Subete no Ai wo Hakaishini." Ed. Tomiyama Takao and Tateishi Hiromichi. *D. H. Lawrence Kitsune to Tekisuto.* Tokyo: Kokusho Kankou Kai, 1994. 148-81.

Watkins, Raymond J. *The Modern Savage: Figures of the Fascist 'Primitive' in Interwar Europe.* Iowa: U of Iowa P, 2006.

Whelan, P. T. "The Hunting Metaphor in *The Fox* and Other Works." *D. H. Lawrence Review,* 21 (1989), 275-90.

Wussow, Heken. *The Nightmare of History: The Fictions of Virginia Woolf and D. H. Lawrence.* Bethlehem: Lehigh UP, 1998.

# A British Canadian Soldier and a War Bride in "The Fox"

Tomohiro Yamamoto

In some of D. H. Lawrence's novels and short stories, Canada is described as the place of emigration or refuge for some characters. Among these works,"The Fox" incorporates Canadian factors into the story most significantly since it reflects historical and social backgrounds concerning Canada: British Canadian soldiers and their war brides emigrating to Canada. The aim of this paper is to examine the effect "The Fox" achieves with these Canadian elements.

First, Henry appears as a British Canadian soldier who ran off to Canada, joined up in the army there and returned to England on his leave. By making use of this background, the text makes his patriotism toward his motherland obscure. Based on this ambiguity concerning his patriotism, this paper demonstrates his mindset that enables to change Bailey Farm into a battlefield and to see Banford as his enemy.

Second, the process of March's marriage to Henry and her migration to Canada precisely corresponds with war brides situation at that time. This paper examines how the case of March fits to and deviates from the typical cases of war brides.

The conclusion of this paper confirms that "The Fox" emphasizes hatred for England and denial of love, which are exactly the opposite of the feelings two phenomena concerning Canada typically contain or evoke. By this maneuver, "The Fox" successfully epitomizes the futility of the war.

# 成長しなかった男たち
## ——D. H. ロレンス，J. M. バリ，帝国——

髙田　英和

## 1

自伝的作品に分類されるロレンス（D. H. Lawrence）の『むすこ・こいびと』（*Sons and Lovers*, 1913）は，同時に，主人公のポール・モレル（Paul Morel）の成長物語，つまり教養小説と一般に考えられている．例えば，川本静子は，ロレンスの生き写しと思しきポールが，母親で恋人のようなモレル夫人（Mrs Morel）から離れ，新しい恋人のミリアム（Miriam），そしてさらなる新しい恋人のクララ（Clara）との親密な関係の後，再びモレル夫人の元に戻るが，最終的にモレル夫人の死を機にして大人の男へ成長すると論じている（221-36）．しかし，ポールが3人の女性との関係による紆余曲折を経ることは事実だが，それを通じて彼が人生の階段を昇り大人の男へと成長すると本当に結論付けることができるであろうか．

『むすこ・こいびと』を当時の社会的状況との関連で考察している石原浩澄は，19世紀末から20世紀初頭にかけての産業化した英国社会において，主人公，ポールの成長は孤立的，孤独的にならざるを得ず，絶望感を曝け出さずにいることは到底不可能なはずであると，その論考において，述べている（86-87）．石原の指摘が正しいとして，ではなぜこのような社会においてポールの成長は不確実さ，疎外感を伴うのであろうか．[1]

ロレンスは，『むすこ・こいびと』の執筆に取り掛かる数ヶ月前の1910年8月に，バリ（J. M. Barrie）の『トミーとグリゼル』（*Tommy and Grizel*, 1900）に深い感銘を受けたことを手紙に記している．

> *Do* read Barrie's [...] *Tommy and Grizel*. [...] [It'll] help you [Jessie Chambers] to understand how it is with me. I'm in exactly the same predicament.
> (*The Letters of D. H. Lawrence* 175)

『トミーとグリゼル』は『ピーター・パン』(*Peter and Wendy*, 1911) の原型とも言える物語である．ピーター・パン (Peter Pan) の雛形とも言えるキャラクターに自己を同一化したロレンスが『むすこ・こいびと』を書いたとき，そこには何が起こっていたのか．ポールとピーターの間の近似に，われわれは何を読み解くことができるだろうか．

本稿の目的は，ポールの (反) 成長について考察することにある．それを考えるにあたって，そこにはもちろんロレンス個人の要因もあるであろうが，むしろ，この時代の生 (life)／性 (sexuality) のかたちや成長という概念の意味や，そして，男性性を規定するメタナラティヴのあり方，より具体的には，エドワード朝期におけるイギリス帝国主義の変容を補助線としたいと思う．[2]

## 2

川本の功績は，母親のモレル夫人を重要視するフロイト (Sigmund Freud) の精神分析との関連で読まれてきた『むすこ・こいびと』を，その子であるポールに焦点をあてポールの成長物語として捉えていることにある．川本の論考は，ポールが「芸術家」である点に注目し，「芸術家」として「生」を全うしたいポールが，そのことに反対する母親のモレル夫人から離れ，自身の生き方を認めてくれる母親以外の２人の女性，ミリアムとクララ，に好意を寄せ，それらの女性を各々１人ずつ恋人として受け入れるという，ポールにとっての大人の男への成長過程を重要視する．川本は，このポールの成長過程において，ポールの身体が「芸術」と「生」という２つの要素に分離してしまい，ポールは同時に２つの要素を追い求めることができない状態に陥ると指摘する．つまり，「知」的な女性である恋人のミリアムはポールの「芸術」的要素のみを，また，「性」的な女性である恋人のクララはポールの「生」的要素のみを満たすだけであり，２人の女性ともにポールのもう１つの要素を満たすことができないのであると．そして，最終的に母親のモレル夫人が亡くなることで，ポールは１人の独立した「芸

術家」として確立され，その「生」を自身の力のみで全うしようと決意するのであり，それは物語の終わりにおいてポールが1人で，暗い中，先に明るく光る街に向けて歩く場面に表れていると，川本は結論付ける．

川本の細密な分析があらわにするのは，この小説は，「芸術」と「生」の分離こそが「成長」の最大の問題であり，その分離と統合の過程を描くことが「成長」の記録であるという前提を，読者と作者が共有したうえで成り立った小説であるということである．言い換えれば，川本の議論がその大枠で成し遂げた指摘は，フロイト的，心理学的な枠組みが，この小説を教養小説という伝統から一見離れたものに見せはするが，その「心理学的な枠組み」こそが，実のところ，主人公の「成長」を記述するための装置として機能しているという逆説的なものである．

ここにわれわれは，「成長」が安定したメタナラティヴでなくなり（19世紀的な教養小説の枠組みが瓦解しつつあって），社会的，文化的な枠組みが，個人の心理の問題に内面化され，フロイト化，心理学化される過程を見ることになる．逆に言えば，エドワード朝期の「新しい成長」の概念を記述するために，このような枠組みを必要としたという点に，ロレンスのモダニズムを見ることもできるだろう．川本の言う通り，この作品は19世紀の成長小説の延長線上にあるが，しかし同時に，この小説はエドワード朝期の「成長」概念の変容を踏まえてもいるのである．

## 3

ロレンスとバリの作品に登場する3人の男たち（ポール，トミー [Tommy]，ピーター）は，女性に対して，ある共通した要素を持ち合わせている．それは，「正常」な男性の規範からは多かれ少なかれ逸脱する奇妙な性（sexuality）である．ロレンスが上述の手紙において交際相手のジェシー（Jessie Chambers）に伝えようとした自身の気持ちは，自伝とも言われる『むすこ・こいびと』の中で，ポールのミリアムに対する思いに表れている．

> "Is she [Miriam] *so* fascinating that you [Paul] must follow her all that way—?"
> Mrs Morel was better sarcastic. [...]
> "I *do* like her," he said, "but—." [...]

"I do like to talk to her—I never said I didn't. But I *don't* love her." (250-51)

そして，ロレンスが手紙で"*Do* read Barrie's [...] *Tommy and Grizel*"(175) と言ったその作品において，ポールがミリアムに対して抱いているのとほぼ同様の気持ちを，トミーはグリゼル（Grizel）に対して表明している．

"Grizel, I [Tommy] seem to be different from all other men; there seems to be some curse upon me. I want to love you, dear one, you are the only woman I ever wanted to love, but apparently I can't." (186)

また同様に，『ピーター・パン』における重要な点は，ピーターがウェンディ（Wendy）のことを好きではあるが，それは母親の役目としてであり，恋愛対象の恋人として愛してはいないことにある．

"Peter," she [Wendy] asked, trying to speak firmly, "What are your exact feelings for me?"

"Those of a devoted son, Wendy."

"I thought so," she said, and went and sat by herself at the extreme end of the room.

"You are so queer," he said, frankly puzzled, "and Tiger Lily is just the same. There is something she wants to be to me, but she says it is not my mother."

"No, indeed, it is not," Wendy replied with frightful emphasis. (134)

母親に対する「子」という位置を望みながら，ピーターは，永遠に少年の状態で居続けようとして，大人に成長することを拒否する．彼は常に純真無垢な状態に自身を置いている．言い換えれば，彼は，「イノセントな主体」として自らを確立することを求めながら，誰とも関係を結ばないこと，要するに，結婚の否定を暗示している．[3]

伝統的な結婚観の不在は，ロレンスにおいても重要な問題となる．ポールは，最終的に，ミリアムと別れて自由になることを決断する．

"I [Paul] have been thinking," he said, "we ought to break off."

"Why?" she [Miriam] cried in surprise.

"Because it's no good going on."

"Why is it no good?"

"It isn't. I don't want to marry. I don't want ever to marry. And if we're not going to marry it's no good going on." [...]

"What do you want to do?" she asked.

"Nothing, only be free," he answered. (Lawrence *Sons and Lovers* 339-40)

ポールは，男女の間に成立する異性愛を拒否する．これは一般にポールが母親との愛を望むがゆえにであると考えられるが，ポールは最終的にこの愛をも否定することになる．[4]「なにも欲しくない，ただ自由でいたいのだ」と，ポールは自由な状態にあるイノセントな身になることを選択する．

これについて，ローゼン（David Rosen）のように，エドワード朝期の社会をそれまでの男性的な社会から全体的に女性化する社会と捉え，ポールも様々な人物と交わる結果，新しい女性化された男になると解釈する批評家もいるが（180-83, 206-07），しかし，1）リード（Donald Read）がエドワード朝期におけるイノセンスの概念の重要性を指摘していること（35-37），2）サール（G. R. Searle）がこの時代を端的に表す言説としてのイノセンスは第一次世界大戦によって消え去ったと示していること（663-71）を考慮すると，ポールを新しい女性化された男より「自由でイノセントな男」として捉える方がこの時期に適しているであろう．自己の内部に不在の中心ともいうべきイノセンスの存在を発見する内向的なポールは，19世紀的成長概念から断絶された身体を有することの重要性を示しているのである．

ロレンスに関しても同様である．ジェシーに宛てた手紙において，ロレンスは自身の身体をイノセントな状態，言い換えると，ピーター・パンのような状態にしたいと彼女に伝えようとしていた．メイソン（H. A. Mason）は，ロレンスがバリの作品に引き付けられたことに関して，"*Tommy and Grizel* [...] takes the story from boyhood to the death of the principal character. [...] Lawrence was telling his

sweetheart [Jessie Chambers], not that he was Sentimental Tommy, but Peter Pan" (197-98) と，ロレンスはピーター・パンと同じ境遇に置かれていたと示し，ロレンスは自身を永遠の少年，ピーター・パンと同一視していたと指摘した．

この問題は，もちろん，性と生の一致という新たな人間生活のあり方を示そうとしたロレンスのテーマ全体と関係している．[5] 私の提示する仮説は，ここでロレンスが示そうとしている新しい生の様式にとって，結婚に至る，女性との対等な異性関係は，もはや受け入れられないもの，つまり，時代遅れなヴィクトリア朝的な成長概念に含まれるものとして提示されているというものである．

## 4

ロレンスがバリの作品に夢中になったことについて，セジウィック（Eve Kosofsky Sedgwick）は，セクシュアリティ（sexuality）との関係で論じており，ロレンスは性的混乱期において大人に成長しないことの正当性をバリの作品に見出したと述べている．"At the age of twenty-five, D. H. Lawrence was excited about the work of James M. Barrie. He felt it helped him understand himself and explain himself. [...] [Lawrence identified] with Barrie's sexually irresolute character"(182). 上述した川本の論考は，『むすこ・こいびと』を成長小説として理解しようとする大枠において，性的混乱期における成長の拒否をロレンスに見出した，このセジウィックの論点と矛盾する．この矛盾は，川本の議論がクィアな論点を包含していないというような表面的な問題ではなく，イギリス，エドワード朝期における「成長」の意味そのものの変容に関わっている．逆に言えば，セジウィックが指摘する，規範的なセクシュアリティの拒否，すなわち成長の拒否という図式にもおそらく問題はある．川本とセジウィックの議論を繋ぐために，エドワード朝期の大英帝国のメタナラティヴが「成長」という概念にどのような意味の変化を与えたかを考察することが不可欠だと，本稿は考える．

そこにあるのは，つまり，成長の拒否が成長であるという逆説である．結婚／規範的な男らしさの獲得／結婚が男性の成長と同一視される構図の背景には，既に指摘されているように，ヴィクトリア朝期大英帝国の帝国主義の言説が控えている．[6] 対して，帝国の拡張の終焉期に入っていたエドワード朝期のイギリスにおいて，かつての規範的男性性に達することは「正しい成長」ではありえない．『む

すこ・こいびと』が,『トミーとグリゼル』,『ピーター・パン』が,そして,ロレンスとバリの作品の奇妙な近似が示しているのは,むしろ成長を拒否し,成長よりも自由を選ぶことのほうが,当時の社会的,文化的なパラダイムに適切に対応した「成長」であったと考えることができるのではないか.

エドワード朝期における帝国の拡張の終焉は,新興国ドイツ,アメリカの躍進と大いに関係があった.例えば,『デイリー・テレグラフ』(*Daily Telegraph*)の元記者で後に『オブザーバー』(*The Observer*)の編集者となったガーヴィン(J. L. Garvin)は,「帝国の維持」("The Maintenance of Empire," 1905)という題で帝国に対するドイツとアメリカの脅威について書いている."Germany and America absorb into their industrial system year by year a number of new workers twice and three times as large as we can find employment for. These States, therefore, gain upon us in man-power and money-power alike; in fighting-power and budget-power [...]" (81).これ以上拡張政策を遂行することが難しくなった帝国は,維持に重きを置く方針に変えざるを得なくなっていたのである.

エドワード朝期における帝国主義の変容に対応して,同様に,英国リベラリズムは"laisser-faire liberalism(自由放任主義)"から"new liberalism(新自由主義)"へと変化した.エドワード朝期を代表する経済学者で,1902年に『帝国主義』(*Imperialism*)を書いたホブソン(J. A. Hobson)は,1909年に『自由主義の危機』(*The Crisis of Liberalism*)を記している.そこには,"[T]he New Liberalism, [...] in the name of 'social reform,' proceeds to the attack upon 'monopolies' and unearned property. [...] Our crisis consists in the substitution of an organic for an opportunist policy, the adoption of a vigorous, definite, positive policy of social reconstruction, involving important modifications in the legal and economic institutions of private property and private industry"(xi)と,古き拡張主義の"laisser-faire liberalism"から国家主導による社会改革に重点を置く"new liberalism"への転換の重要性が指摘されている.

重要な点は,ボーア戦争を契機にしてその後のイギリス帝国のあり方が問題視され,チェンバレン(Joseph Chamberlain)を筆頭に「保護貿易(関税同盟)」をスローガンとする政権政党の保守党と,アスキス(H. H. Asquith),ロイド=ジョージ(David Lloyd George),チャーチル(Winston Churchill)を擁する「自

由貿易」を押し進める自由党が，衝突を繰り返していたということである．この混乱は，逆説的に，「自由」こそを当時の政治の中心の話題とした．そして，1906年に行われた総選挙において，政権は自由党へと移ることになった．しかし，自由党が実際に採った政策の重きは，保守党の掲げていた社会改革にあり，さらなる自由放任主義の推し進めではなかった．それこそが"new liberalism"，またの名を"social imperialism"であった（Rose Chap. 4; Semmel Chaps 3 and 6）．問題は，帝国の維持とリベラリズムの関係だったのである．

エドワード朝期における「成長」とは，一言で言うならば，それは，「成長」が「維持」であるというパラドクスである．このパラドクスは，帝国主義批判から新たなる自由主義を思考しようという進歩主義的な思想から，「維持」と，そしてそこにおける「自由」の価値こそが，「成長」なのだとして正当化されている．しかし，ここでより重要なことは，この変化は，社会的な政策への批判に重点をおくよりもむしろ，個々人の思想と身体のレベルにおける変化，変容として指摘されたということ，大英帝国の制度は維持するが，その内実を変える変容として語られたということである．ここにこそ，20世紀の「成長小説」としての『むすこ・こいびと』の意味があるのだ．

この小説の結論において強調される自由の価値とは，当時の政治的な言説において，しばしば議論された，極めて時代的に特有の概念だったということである．エドワード朝期における「成長」概念の変容は，帝国への批判から新しいリベラリズムへという政治的枠組みと結び付いている．その様子は，ロレンスの作品の結末が，実に，これ以上なく鮮明に記述している．

> Turning sharply, he walked towards the city's gold phosphorescence. His fists were shut, his mouth set fast. He would not take that direction, to the darkness, to follow her. He walked towards the faintly humming, glowing town, quickly.
> (*Sons and Lovers* 464)

ポールは自由を得たからといってその後の人生を１人自身の手で切り開き大人の男へと成長することができるわけではない．ポールは，暗い中，先に明るく光る街に向けて歩き進めるが，そこにはポールを満足させることなど何もないはずで

ある．なぜなら，このような状態に陥っているポールに将来の明確なビジョンを描くことなど不可能であるからだ．

モレッティ（Franco Moretti）によると，中産階級的価値観を身に付けて日々社会的上昇に勤しむ主人公を物語の中心に据えていた伝統的な教養小説は，エドワード朝期に衰退し始め，機能し難い状況に陥った（229-245）．この時期における教養小説の衰退，機能不全の原因について，秦邦夫は，ジェイムソン（Fredric Jameson）の「モダニズムと帝国主義」（"Modernism and Imperialism"）での議論との関係性において考察し，その原因は，1884年のベルリン会議以降急速に西洋諸国の帝国主義的政策が推し進められた結果，本国と植民地または社会と個人を１つの全体（性）として把握しそれを維持することができなくなり，分離して再調和することが困難な事態に突入したことにあったと述べている．秦は，さらに，文学テキストにおいてこのような状況に陥っている人物の例の１人として『むすこ・こいびと』のポール・モレルを挙げ，ポールが以前の教養小説の主人公のように大人の男へとは成長することができずに未成熟な状態で留まらざるを得ないことを指摘している（76-78）．

上記の場面においてポールにできる唯一のことは，ただ今の状態を維持することのみである．その証拠に，自身の身体を，汚れなき純粋なるもの，要するに，ピーター・パンのような無垢なるものとして保ち続けるために，他の誰とも，あらゆる異性対象者との交際を拒否することを決意するポールは，"I think there must be something the matter with me, that I *can't* love. [...] [W]hy, why don't I want to marry [...] anybody? [...] [T]o give myself to them [Clara and Miriam] in marriage—I couldn't. I couldn't belong to them. They seem to want me, and I can't ever give it them"（Lawrence *Sons and Lovers* 395）と，心の内を打ち明けている．[7]

それは，また，当時の政府，自由党が以前の拡張政策に代わる，新たな対外的経済戦略を明確に打ち出すことが出来なかったことと関係がある．首相のアスキスは「国家的効率（national efficiency）」を合言葉に国内問題には対応したが，躍進する列国を前にして国外問題に対する有効な打開策を提示することはなかったのである．ゆえに，"blind agents of a great force"（Lawrence *Sons and Lovers* 399）の１人として，ポールは"his experience had been impersonal"（Lawrence *Sons and Lovers* 399）と感ずるのだ．彼の身体と内向化した生活様式は，図らずも，エド

ワード朝期特有の雰囲気が可能にしたと思しき，イギリス帝国の拡張の終焉と密接に連動している．

## 5

本稿は，ロレンスがバリの『トミーとグリゼル』に言及している1910年8月の手紙に注目しながら，『むすこ・こいびと』におけるポール・モレルの（反）成長を，帝国主義との関係において考察した．その際のポイントは，20世紀初頭，エドワード朝期の帝国が，社会的，文化的言説のレベルにおいて，拡張の終焉に差し掛かっていたということにあった．拡張主義を推し進めることが困難になった帝国において，その主体としての個の身体は，以前のように肉体的，精神的に健全な大人に成長して帝国を支えるという予定調和的な物語を，何の疑いもなく受け入れることが不可能になった．それを自身の身体で感じたロレンスは，ピーター・パンの原型が描かれている『トミーとグリゼル』の重要性を上述の手紙に記し，半自伝的小説の『むすこ・こいびと』ではピーター・パンと同様にイノセントで成長を拒否するポール・モレルを描いたのである．『むすこ・こいびと』は“the tragedy of thousands of young men in England”（*The Letters of D. H. Lawrence* 477）であると，ロレンスは記している．

## Notes

*本稿は，2010年の日本ロレンス協会第41回大会における発表原稿に加筆，修正を加えたものである．

1 『むすこ・こいびと』と“Bildungsroman（教養小説）”に関して，Buckleyは，川本と同様に，ポールを主人公とした『むすこ・こいびと』の特徴は“Bildungsroman”の一形態としての“Künstlerroman（芸術家小説）”にあると論じ，この2つの間に存在する連続性を強調する（204-24）．Pinkneyは『むすこ・こいびと』が“Künstlerroman”であることについて指摘してはいるが，彼は，Williamsの*The English Novel*（1970）における議論――『むすこ・こいびと』の特質は「個人」の「社会」からの逃避，疎外が描かれていることにある――に依拠しながら，“Bildungsroman“と“Künstlerroman”の間にある差異の方に注

目して，ポールの疎外感，不安定感を問題視している（27-51）. Pinkney以外に，『むすこ・こいびと』を当時の社会的状況との関連で考察しているものとして，Aldenが挙げられる.

2 武藤は，『トミーとグリゼル』と『むすこ・こいびと』の関係の重要性を指摘しながら，『ピーター・パン』と帝国，ピーターとその性について述べている．木下は，帝国の危機との関連で，モレル夫人が帝国の母として機能していることについて論じている.

3 『トミーとグリゼル』には，"Poor Tommy! he was still a boy, he was ever a boy, trying sometimes, as now, to be a man, and always when he looked round he ran back to his boyhood as if he saw it holding out its arms to him and inviting him to come back and play. He was so fond of being a boy that he could not grow up (121-22)"と，成長を拒否するピーターの原型が描かれている.

4 ポールによる母親愛の否定は，彼が，彼の人生において終始重要な人物であり続けた母親のモレル夫人を，最終的に自身の手によるモルフィネの力によって葬り去ること（Lawrence *Sons and Lovers* 437）に，表れているであろう.

5 この点に関して，ミリアムとクララが共に「新しい女」であることは重要であろう．例えば，Simpsonは，当時の「新しい女」の文脈が，ミリアムとクララを対照的な女性として定義していること，つまり，「精神（芸術）」と「肉体（生）」の対比は，「新しい女」の誕生の必然，それへの反応として作品世界にもたらされていることを指摘している．また，Trotterは，1）当時のsexuality概念の変化が，この小説の生と性についての議論をもたらしたこと，そして2）しかし，この小説は，性についての"sex novel"ではなく，それを社会的な文脈のなかに戻すことで成長小説として成立していることを指摘している．両者の指摘は共に，生と性の意味の社会的な変化が，（女性登場人物の造形を通じて）この作品の「成長」概念の地平を決定づけていること，そして，そのとき，この作品における「成長」とは，（社会的に変容しつつある）生と性との複雑な関係の下にしか理解しえないものであることを示している.

6 ヴィクトリア朝期における男性性と結婚の関係について，Toshは次のように述べている．"Masculinity, after all, was essentially about being master of one's own house, about exercising authority over children as well as wife and servants"(89).

"Only the final stage of marriage was a relatively fixed point in the transition to adult masculine status [...]"(122). 同時代の理想的な男性主体のあり方と帝国主義との関係については，Manganを参照.

7 モレル夫人が，ミリアムとクララ的要素を併せ持ち，民間の「女性協同組合(Women's Co-operative Guild)」に所属し「社会衛生（social hygiene)」に関心を持ち「性教育（sex education)」の知識を得てその効果をポールに対して発揮し彼の身体を国家に代わって管理しようとするがゆえに（Trotter 206-08)，彼は彼女を排除するのである.

## Works Cited


Alden, Patricia. *Social Mobility in the English Bildungsroman: Gissing, Hardy, Bennett, and Lawrence.* Ann Arbor: UMI Research Press, 1986.

Barrie, J. M. *Peter and Wendy.* 1911. London: Hodder and Stoughton, 1913.

---. *Tommy and Grizel.* 1900. London: Hodder and Stoughton, 1913.

Buckley, Jerome Hamilton. *Season of Youth: The Bildungsroman from Dickens to Golding.* Cambridge, Mass.: Harvard UP, 1974.

Garvin, J. L. "The Maintenance of Empire." *The Empire and the Century.* 1905. Ed. Charles Sydney Goldman. London: Routledge, 1998. 69-143.

Hobson, J. A. *The Crisis of Liberalism: New Issues of Democracy.* 1909. Ed. P. F. Clarke. Brighton: Harvester, 1974.

---. *Imperialism: A Study.* 1902. Rev ed. London: Archibald Constable, 1905.

Jameson, Fredric. "Modernism and Imperialism." *Nationalism, Colonialism, and Literature.* Terry Eagleton, Fredric Jameson, Edward W. Said. Minneapolis: U of Minnesota P, 1990. 43-66.

Lawrence, D. H. *The Letters of D. H. Lawrence.* Ed. James T. Boulton. Vol.1. Cambridge: Cambridge UP, 1979.

---. *Sons and Lovers.* 1913. Ed. Helen Baron and Carl Baron. Cambridge: Cambridge UP, 1992.

Mangan, J. A. *The Games Ethic and Imperialism: Aspects of the Diffusion of an Ideal.* New York: Viking, 1986.

Mason, H. A. "Lawrence in Love." *Cambridge Quarterly* 4 (1969): 181-200.

Moretti, Franco. *The Way of the World: The Bildungsroman in European Culture.* New ed. London: Verso, 2000.

Pinkney, Tony. *D. H. Lawrence.* New York: Harvester, 1990.

Read, Donald. "Crisis Age or Golden Age?" Introduction. *Edwardian England.* Ed. Donald Read. London: Croom, 1982. 14-39.

Rose, Jonathan. *The Edwardian Temperament 1895-1919.* Ohio: Ohio UP, 1986.

Rosen, David. *The Changing Fictions of Masculinity.* Chicago: U of Illinois P, 1993.

Searle, G. R. *A New England?: Peace and War, 1886-1918.* Oxford: Oxford UP, 2004.

Sedgwick, Eve Kosofsky. *Epistemology of the Closet.* Berkeley: U of California P, 1990.

Semmel, Barnard. *Imperialism and Social Reform: English Social-Imperial Thought 1895-1914.* London: George Allen, 1960.

Simpson, Hilary. *D. H. Lawrence and Feminism*. Illinois: Northern Illinois UP, 1982.

Tosh, John. *A Man's Place: Masculinity and the Middle-Class Home in Victorian England.* New Haven: Yale UP, 1999.

Trotter, David. *The English Novel in History 1895-1920.* London: Routledge, 1993.

Williams, Raymond. *The English Novel: From Dickens to Lawrence.* Oxford: Oxford UP, 1970.

石原浩澄「D. H. ロレンス『息子と恋人』論——教養小説としての再考の試み」『立命館言語文化研究』7-1 (1995): 49-87.

川本静子『イギリス教養小説の系譜——「紳士」から「芸術家」へ』研究社, 1973.

木下誠「家庭と帝国をつなぐもの——『息子と恋人』における〈母性〉のイデオロギー」『筑波イギリス文学』5 (1999): 111-22.

秦邦夫「「幼年期」の終わり？——メイ・シンクレアと初期モダニズムのジレンマ」『転回するモダン——イギリス戦間期の文化と文学』遠藤不比人・大田信良・加藤めぐみ・河野真太郎・高井宏子・松本朗編, 研究社, 2008. 70-90.

武藤浩史「1900年——帝国と「アングロ・ケルト」, セクシュアリティとジェンダー, 労働党と自由党」『愛と戦いのイギリス文化史1900-1950年』武藤浩

史・川端康雄・遠藤不比人・大田信良・木下誠編，慶應義塾大学出版会，2007．5-19.

# The Men Who Would Not Grow Up: D. H. Lawrence, J. M. Barrie, and Empire

Hidekazu Takada

In a letter in August 1910, D. H. Lawrence wrote that he had been deeply impressed by J. M. Barrie's *Tommy and Grizel*. The hero in the Barrie's work is considered to be the prototype of Peter Pan, a figure of innocence who rejects to grow up.

What is important in Lawrence's reference to the Barrie's work is, I believe, the socio-cultural context in which the politics of sexuality/life was imagined: the new phase in the political imagination on the British Empire in the Edwardian age. At this time, the traditional masculinity, which once worked for the advocate of empire-building, grew irrelevant.

This paper aims to disclose the reason why Lawrence was fascinated by Barrie's works (*Tommy and Grizel* and *Peter Pan*), focusing on Lawrence's *Sons and Lovers*. Its hero Paul Morel rejects the idea of having a relationship with a woman and marrying her. He tries instead to keep his youth. Both Lawrence's and Barrie's works thematise heroes' non-growth. This is to be understood in not only the sexual/living, but also the political discourse of the age.

**特別寄稿**

# 学会回顧録
## —日本ロレンス協会草創期—

和田　静雄

この稿を起こした今日は，11年11月１日と１が並んで，テレビでは九州新幹線や九州内の観光路線を含めた記念切符セットの発売に行列の出来た博多駅の映像が出ていた．その一方では，東日本大震災と原発事故から８ヶ月となるニュースも流れていた．

あの時以来，日本をおゝう空気には明るさ元気さが欠けて来た．又，私が毎月定期購読する中央公論の本年度の11月号の表紙には「文学なんて要らない⁉」の大きな見出し文字がおどっていた．それに関しての対談が一篇に小論文が四篇あったが，その中の一番の問題は大学改革の学部学科の再編で，外国語文学例えば英文学科が消失，教養部消失などが論じられている．その代わりに○○文化科とか××コミュニケーションなどの名称が使用される現状が語られていた．悲しむべき状態だが時の流れでは仕様がないという風に論じられている．

日本ロレンス協会員もほとんどが大学短大に職を得て研究教育に日々を過ごされているのだが，こゝ約20年間に及ぶいわゆる大学改革の流れは，その身にこころよい改革改編とは言い難いものだったろうと思われます．かく言う私はそれが始まりかけてから直ぐに定年退職していた．後に残った先生方からその後まもなく会った時に，「いい時におやめになりましたね」と言われて恐れ入ったこともあった．少々心苦しい時期もありました．

この回顧録で書こうとするロレンス協会の草創期は言はゞ恵まれた時代の物語のような気もします．しかし思い出し思い出ししながら筆を進めるつもりですが，一番の難点は書く人間，つまり私がもう余りにも高齢であることです．現在

私は89歳，協会の設立当時はもう大昔，大半は忘れています．記憶はまばらになっている．協会の初代の会長，二代の会長の順があやふやです．西村孝次先生と甲斐貞信先生の名だけはしっかりと覚えているけれど，どっちが先に会長になられたかは自信をなくして，吉村宏一先生におたずねすることにしました．吉村先生は甲斐先生と共に会の創立に初めから大いに働かれた方ですから，会の現存では最古参の先生，私として先生の御記憶を頼りにしてこの稿を進めることにしました．

戦後，復員してから九州大学の英文学科に入り卒業した私は，福岡市内の県立高校の英語教員になり，やがて市内の九州産業大学の教養課程の英語の教師となりました．そして日本英文学会の会員になりました．会員として年１回の学会には欠席することなく参加しました．しかしまあ会員数の多いこと．従って初日当日の受付でもらった研究発表のプログラムを見て，どこの教室のどう言う題目の研究発表に参加したら良いのか，正直な話思案投首の有様でした．一応の系統立てはありましたが，一教室で始めから終わりまで聴くというわけにはいきませんでした．この教室にも行きたいし，あっちの教室にもと頭の中は複雑です．毎年のことですが大いに悩みました．それで会場校の広い構内を，あっち行きこっち行きしたものでした．

ところが1969（昭和44年）の日本英文学会の初日，会場内に日本ロレンス協会の発足を知らせるビラが貼り出されていました．私はそれを同僚の教員から知らされ，これはいいとばかりに早速会場の教室に駆けつけました．吉村先生によればそれは龍谷大学の教室と言うことで，私はその日の英文学会の会場校のことは，ロレンス協会の発足以外は記憶から完全に脱落していました．

その頃，私は47歳でやっとロレンスの作品の多さ，小説詩エッセイから絵画に至るまでその種類の多さにも驚き興味を集中させ研究も軌道に乗っていた時で，協会の創立は本当に渡りに舟でした．九大の英文科を卒業する時の論文はエドガー・アラン・ポウに関するものでした．卒業後はアメリカ文学を読んでいましたが，どうも心にピンとこないものがあり，それが親しい知人の助言でD・H・ロレンスに変わったのは，大学に勤めるようになって間もなくでした．ロレンスの作品は私がそれまで読んで来たアメリカの作家のものに比べると間口が広いと言う感じでした．それに奥も深く私は大いにロレンスに研究のやり甲斐を感じて

いました.

ロレンス研究者は是非お集りをと言うビラに元気で駆けつけた教室で，私は甲斐先生や西村先生と初めて顔を会わせることになりました．そこで甲斐先生の話を聞いて即座に会員になった次第です．西村先生はお名前だけは主に翻訳者として以前から存知あげておりました．小柄なお人で始めからその元気よさに圧倒されたのはよく覚えています．そしてこの会の創立者として大いに努力された甲斐先生が初代の会長に，副会長が西村先生ということで，会長と副会長の任期も２年ということも決まりました.

そして本当に学会として機能し始めたのが翌年昭和45年の７月25日の日本ロレンス協会第１回大会からです．学校関係は夏休みに入り，教員がほとんどの大会には参集しやすい時でしたが，大分暑かったようです．会場が学校関係の場所でなかったのも，私の記憶に残った理由の一つかも知れません．場所は京都府立勤労会館の会議室が使用されました．当然学校外の場所の使用ですからそれなりの費用が要ったと思いますが，そのやりくりまでは分かりません．これ以降は会場は学校が使われることになりました.

この第１回大会は，１日だけの大会でした．午前中に２人ほどの研究発表があり，その後に30分から50分ほどの役員会で，昼休みとなり午後は研究発表かシンポジュームとなり，その後総会と懇親会が行われる一応の大会の形式が定まりました．又，会員数に応じて地区を決め評議員も決定しました．こうして日本ロレンス協会は学会として機能して行くことになったわけです.

そしてこの年には日本ロレンス協会会報の第１号が会員に届けられました．この会報の発行にあたり，その冒頭に述べられた甲斐先生の御言葉を参考の為書きしるします.

「会報発刊にあたって　会長　甲斐貞信はここにこうして『会報第１号』をおとどけできることとなったのも，要は，現在80名という頼もしい会員数があればこそのことであって，同じ京都で同じロレンスで結ばれた大橋，岡田，奥村，甲斐の４人がよりより顔を合わせ話し合っているうちに，〔……〕今世紀なぞの天才ロレンスという人間の文学にとりつかれ，何とかして力を合わせ，正体を確かめようとしたその初心においては，今も変わりはない．こうして「研究会」がついに「日本ロレンス協会」と改名せられ，昨夏その第１回の大会が開かれるよう

になった現時点にあっても，なすべきいろいろのことが考えられはするが，しょせん同じこの一筋の道にこころざす会員諸氏のご賛同ご協力なくしては，一切徒労に終わることというまでもない．とはいえ，元来無為無能のわれわれ，協会の今後の発展のため，例えばお手持ちの抜刷のような貴重な研究資料のみならず，忌憚のないご意見ご叱正をも，つつしんでお待ちするものである．……」

以上の文章でおわかりと思うが，発足当時の会員数は80名で，以後徐々に増えて行くことになり，150名を越えるのが約十年後といったところです．残念なことにはここでお名前が出た４名の方々は既に亡くなられました．会の草わけ的存在の方々でした．大いに感謝したい思いです．

会の運営の中心は無論会長ですが，この人選は初めは殆どが初対面同士，選挙というわけにはいきません．互選みたいな推薦ということになり，会長及び副会長を決めることになり任期は１期２年とすること丶し，再任も良しとする案で決定しました．初代会長は甲斐先生で副会長は西村先生となり，共に昭和45年から49年までの４年間２期勤められました．次は西村会長に和田副会長という顔ぶれで，これも49年から２期４年その任に当たりました．

次の３代目会長は私でした．大橋安一郎先生が副会長を引き受けられました．この頃から協会員の人数も増加し，年１回の大会にも元気が出て来たように思われます．初め頃の80名から徐々に増えた会員数は私が会長を辞める頃には150名ぐらいになり，私は間もなく200名になると予想していました．現在の減少に転じた協会の状況と比べて考えると，色々と難しい問題が存在するのではと考えさせられます．

私の在任中の一番大きな話題は，ロレンスの死後50年を記念してのロレンス・フェスティバルが英国のノッティンガムを中心にして行なわれ，わが協会からも私をはじめとして数人のグループが参加したことです．これは無論英国ノッティンガム地区の行政機関の観光にかゝわる部門の主催で，日本ロレンス協会の事務局あてに主催を通知しフェスティバルへの参加の勧誘状が届きました．会長として会員に知らせたところ，関西地区を中心に参加希望者がいることが分かり，私も参加を決めました．その結果私が大体の渡航計画を作り旅行社と打合せ英国航空使用で，往復は旅行社の「ハローツアー・ヨーロッパ」の便を利用することに決定しました．この旅行は私に大きな責任があるので，これに関する書類やメモ

類だけは一括して紙袋にしまいこんでいたのが見つかり，これだけはやゝくわしく報告が出来ることゝなりました．

私あてに送られて来たプログラムでは，５月７日に始まり５月18日まで各種の催しがあることになっています．私達グループは５月３日に東京発ロンドンに英国航空で出発しました．帰国予定は５月17日東京着の旅となりました．ロレンスの死後50年祭ですから1980年（昭和55年）の話です．今から見れば32年も前の話になり，大半の会員にとっては遠い昔話と言えるかもしれません．

参加者は私以外には関西地区から朝日千尺先生，今泉晴子先生，藤原満寿子先生に杉山泰先生で，北海道からは簗田憲之先生の合計６名のグループです．ロンドンでは自由行動で７日の午前中にノッティンガム集合，早速に昼からグループとして市のアルバニイホテルの開会式兼昼食会に参加しました．配布のプログラムによれば12時15分開幕，プログラムにはリタラリイ・ランチョン（Literary Luncheon）とあります．文学の話をしての昼食会と言うことでしょう．

席はそれぞれ指定されました．私のテーブルには私以外は女子大生らしき若い女性が確か３名ほどいたような思いがあります．開会の挨拶の後はテーブルでロレンス中心の話などで楽しい食事だった記憶がかすかにあります．問題はこの会が済んでからです．私達グループが会が終わって会場を出ようとしたところを，英国ＢＢＣ放送のノッティンガム支局の人が待ちうけていました．事前に日本から日本ロレンス協会員がわざわざ参加の為やって来ることが知らされていたようです．早速テレビへの出演交渉を受けました．緊張しました．断る理由はありません．日本のロレンス協会の宣伝にもなると思い承知しました．それでノッティンガム支局に連れて行かれて放送という事に相なった次第です．

放送は夕方の地方ニュースの中で放映されました．その内容は何しろ初めての経験なので比較的くわしく覚えております．それは放送局のニュースキャスターの注文と言うか指示があり，先ず私以外の５人が大きなテーブルを取り囲んで座り大きな声でロレンスの小説の一部を読み，それを放映した後に今度は私が会長として日本ロレンス協会の現状や会員数にこれからの抱負をしゃべるというものでした．つたない英語ながらどうにかやりました．僅か数分のテレビ出演ですが，大変緊張した思いがあります．

その次の日です．私がホテルの前で市の中心に向かう為タクシーを拾おうと

立っていたところ，通りかゝった市民から握手を求められました．日本からようこそと言う挨拶でした．それから後も，お昼に市の公園を散歩中にも呼び止められ握手を求められるなど，テレビの力には感心せざるを得ませんでした．

催しものは初日の夜８時からノッティンガム大学でジェイムズ・ボウルトン教授のレクチャーがありましたが，私は疲れて出席していません．この後はロレンス原作の演劇や他に絵画展などがありました．劇場には私も足を運びましたが，完全に方言による劇で正直な所，私には何が何やらの英語でした．土地の出席者にも聞いたのですが，普通の人には分かりかねる方言ということでした．私として興味のあったのは絵画展でした．あれだけの数の彼の画いた少々変わった絵画を見るのは初めてのことで，改めて彼の性格なるものを考えざるを得ませんでした．

この期間に私達はロレンスの生家に事務局を開いた英国ロレンス協会も訪ね，お互に歓を通じあいました．驚いたことに彼の故郷イーストウッドの中心の通りには小旗が道路上空に張りめぐらされ，町の商店は軒なみのショーウィンドウにロレンスの肖像画や写真，彼の小説に出て来る農家や農場の写真などが展示されていました．これは私にとっては本当に驚きでした．実は以前にこの町を訪れた時はロレンスの名前を口にするのもはゞかられるような状況にあったからです．

実はこれより８年前に私はノッティンガム大学のゲストハウスに宿泊していました．無論ロレンス研究の為で，大学図書館にあるロレンス・コレクションを先ずどんなものか調べました．予想とは違って資料は少なく特別目新しいものはありませんでした．次にこゝを基地にしてイーストウッドに出向き聞き取り調査をしました．ロレンス一家を良く知っているというお婆さんが一人現存中と聞いてその女性から色々話を聞きました．興味を引いたのは地区の公立図書館にロレンスの母親がほとんど毎日のように出入りし，よく本を読んだり貸し出しを受けていたということです．ところがそれが反って土地の住民達の反撥を買っていたと言うことです．つまりお高くとまっていたと言う意味です．成程と思うものがありました．その他，土地の一般の男性達に話を聞こうとしたのですが，これはもう惨めなものでした．ほとんどの人から，何であんな色情狂のような男を研究するんだ．英国にはシェークスピアを初めとして他に立派な小説家が沢山いるじゃないか，と私自体がおかしな人間に見られているようなことになってしまいまし

た.

しかし，それから８年後ロレンスに対する評価はころりと大転換，芸術家の評価と言うものは，かくも突然変化をするものなのかと考えこまざるを得ませんでした.

尚，このノッティンガム大学のゲストハウスに宿泊するに当たり，既に２年間ほどこの大学に留学中の北大の簗田先生にお世話になり，私がノッティンガム大学に到着と同時に直ぐにそこに泊まれたのは簗田先生が面倒にもかゝわらず私の依頼で大学当局に色々と手続きをとり準備を整えられたおかげです．ここで改めて感謝致します.

滞在中は毎晩学生食堂の一隅にあるパブでアルコールをたしなみました．何しろ為替は固定の１ドルが360円の時代の外国滞在ですから学外での高価な酒を飲ませる所に行けません．そのパブでは又丁度滞在中の長崎大の鉄村春生先生とも色々とお話が出来ました.

その頃は中国をまだ中共と呼んでいた時代です．第二次世界大戦が終わって，中国大陸にも平和が来た時代ですが，日本と中共政府の間に国交の無い時代です．新興国の中共は若い人材を世界の各大学に派遣していたようです．ノッティンガム大学にも十数名ほどの中共からの留学生が来ていました．彼等も毎晩のようにグループになってパブに来ていましたが，私達日本人を見つけると，さも嫌なものを見たと言う風にプイと顔をそむけ通りすぎて行きます．非常な不快感を味わったもので，これは今でもはっきりと記憶にあります.

それからこのロレンス・フェスティバルに私達グループが訪れましたが，その中の一人である杉山泰先生がその後，ロレンス一家が住んでいた炭坑住宅に自ら住まわれて，まさに体験的研究をされたのはびっくりし感心致しました．それもこの時のフェスティバル参加が一つの契機になったものと思っています.

又これで英国ロレンス協会とも一層交流の機会が増えました．そのせいかこの後で，ロレンスのネームプレートをさる寺院に設置永久保存したい，これには相当の金が必要なので日本のロレンス協会にも応分の寄付をして貰いたい，との申し出がありました．私が会長辞任後のことで正確な時期やその寺院の名もおぼろげですが，とにかく役員会で賛同を得て大会でも賛成され相当の金額を贈った記憶があります．但し金額は知りません．送金したのは確かです.

それで他日私が英国に行った際それを確かめる為にわざわざその寺院を訪れました．だがそれがウエストミンスター寺院だったのか，セントポール寺院だったのか，はっきりと記憶にありません．今となって推測すればどうやらウエストミンスター寺院かなと思われます．セントポール寺院の方はネルソン提督やウェリントン将軍などの国民的英雄の墓や記念碑のある所．芸術家系統はウエストミンスター寺院のようです．そこで彼の名を刻んだ金属板が壁にあるのを見届けました．「ポウエット・D・H・ロレンス」と肩書が詩人となっており，妙に納得して帰った記憶があります．

この頃，日本は今と違い，まだ国として景気は良かったものです．それでまあ英国の協会から金の工面を持ちかけられたものと思います．協会の方も会員が増える傾向にあり，協会の運営も順調でした．私の会長時代は実は３期６年も続いたわけです．その間福岡で大会を２度開催しました．初めは私の勤務する九州産業大学でやり，２度目は大学を出ました．これは九産大が交通の便が悪い所にあった為に参加者に迷惑をかけまいと私自身が考えたものです．福岡市の中心地に私学会館のホテルがあり，それに隣接して都久志会館という県の教職員組合かそんな公共の共済組合の設立によるホールや会議室を備えた施設があり，使用料も安いものでした．それで役員会や大会はこの施設を借用し懇親会はお隣のホテルでやろうと決めました．但し少々金は要ります．そこで九産大に掛けあって助成金というものを出して貰い会の会計には大きな負担をかけずに大会を開催することが出来ました．大会後の懇親会の二次会には，希望者一同と連れ立ち直ぐ川一つを隔てた対岸の博多中州のバーに行きました．私はまだ足腰丈夫で元気な時代だったものですから，私の行きつけのバーに連れて行ったわけです．今は足腰が哀れな状態になった私には，思い出深いものになりました．

助成金というものに言及しましたが，これは今でも学会開催に当たり，主に私立大学では出す所が多いようです．会員が比較的少ない会には有りがたいものです．これに関しては四国の松山大学ではそのおかげもあり２度も大会を開いております．私もおかげさまで２度も道後温泉に入り名物の坊ちゃん列車を見ることが出来ました．

さて前にもちょっと述べたように私は６年も，ある意味では会長に居すわったものですが，これが良かったか悪かったは別にして，会が順調に運営され元気が

あったと思うことにしています．実は私は任期というものを正直忘れていました．それが或る先生からもう３期ですよと注意されて慌てゝ会長を辞任致しました．これは一つは私の楽天的な少々間の抜けた性格によるものと，もう一つ忘れてはならないのは西村岩雄先生が会の事務的な面を１人で凡て上手にこなされていたおかげなんです．その為に私は苦労知らずのように会長を勤めることが出来ました．西村先生は私が九産大を定年で辞めた後，私のそれまでの大学での役目をきちんと継いでいたゞきました．今ここに改めて先生に感謝するものです．有難うございました．

所で会の運営には問題が一つありました．それは会の運営に必要な事務処理の面です．私はそれを西村先生と言う優秀なマンパワーを得たおかげで乗り切って来ました．しかし会員が増えるにつれ少々事務量も増えて来ます．会長が事務部門の凡てを引き受け，会長交代の度に，事務部門も会長校に移るというこの創立以来の慣行ではやれなくなるかもしれないということを早く見抜いて，これを改める考えを役員会で話し合わなかったことは私の失敗だと考えています．

その為に，私の後で４代目の会長に就任された大橋安一郎先生は，僅か１年で会長を辞任されました．事務上で先生をお助けする人が居なかった為に１年でお辞めになったものと思われます．早くから事務処理の部門がその後認められながらも，大橋先生の後任の打木城太郎先生の代にも出来ず，出来たのはずっと後になってからです．そのせいで森晴秀先生が会長の時に，会計上のミスが見つかり，先生は会長を辞任され，会からも退かれました．誠に残念な事でした．早く事務部門が別に出来ていたらと思われます．

この時の資料は幸いにも私の手許に残っていますが，それによると，第28回の大会の役員会議の議題の協議事項の第１項目に，(1) 事務機構（事務局長職設置の必要性）(2) 事務局の所在：会長が変わるたびに膨大なバックナンバーその他の資料の移送，管理する不便 —— 特定の出版社に事務局を置けないか —— 事務処理アルバイト費予算化と連動，とこれが示してありました．が遅すぎました．早く役員会で議論しなければならない問題でした．

この頃には会員数も200名を越えていたようです．年１回の協会の大会も盛んになりました．その研究発表も充実して行ったかというと，そうも行かない時もあったようです．いつの大会だったかは忘れましたが，発表者が西日本の高校の

先生でした．その発表の内容はひどいもので，まさに神がかり的で聞く方が，呆気とさせられる程独りよがりの説を本人は得々として発表していました．私は途中で何度も発表中止を申し出ようとしたのですが，司会者が黙って聴いていたので，我慢して憤懣を押さえていました．これは今でも忘れられない発表会での1コマです．

こうして協会の草創期は色々ありましたが総じて元気が良かったのは確かな事です．私も元気でした．元気すぎのせいか酒もよく飲みました．これが私の最大欠点で昔から大酒飲みで，大会に二日酔いで出席し，会場で寝こんで長老の先生からお叱りを受けたこともあります．赤面の至りです．

この原稿が印刷されて協会の皆様の目に触れる時には，私は90歳になっているでしょう．私事ですが現況を報告して終わりたいと思います．皆様の老後の何かと参考になればと思って敢えて付け加えたいと思います．

80歳の時に白内障になり初め右目に，次に5日目に左目を入院せずに1日入院という名目で手術しました．御参考までに言うと，手術は簡単ときいていたので私は高をくくって前日いつもの如く晩酌をして手術を受けましたが，これが大間違い．アルコールのせいで麻酔が効かず大あばれ，左右から看護師に押さえつけられての手術でした．これにこりて次の左目の時は前夜はアルコール抜きで臨んだせいであっという間に終了．1日入院ということで手術後ベッドで1時間点滴を受けて帰宅しました．しかしその後左目が1年後に又かすみ，後発白内障とされ，レーザー光線手術でこれは簡単に治りましたが，又その1年後同じでレーザー光線手術で治り，以後は大丈夫のようです．

それから3年後の83歳の時に脊柱管狭窄症の手術を受け，今度はその後遺症で両足が痺れ特に左足がひどく歩行が不自由となりました．リハビリに励んで大分足の調子が良くなって来たら3年後に左膝関節の軟骨がすりきれました．皮肉なもんです．リハビリが仇になったようなものです．病名は変形性膝関節症，おかげで以前より悪くなりました．先年早稲田大学での大会の際航空便で上京したのですが，広い羽田空港内の途中で歩行不能になり，係員に助けられ途中で建物外に案内され待機のリムジンバスで他の同様の数名の老人達と一緒に建物正面まで送ってもらいました．これにこりて単独での長距離移動は断念するに至りました．年をとるとはこういうもんなんですね．前もって老いに備えることは難しい

ものです．

昔，子供の頃「初めは４本足で歩き，次は２本足，最後は３本足で歩くもの，なーんだ？」というナゾかけがありましたが，分からずに人間という答えを聞いてもピンときませんでした．しかし今は実感しています．いよいよ杖なくしては歩けなくなるなというのが今の私の実感です．最後に私ごとを長々と述べましたがよろしくお取り下さい．（了）

# 書　評

## Beatrice Monaco, *Machinic Modernism: Deleuzian Literary Machines of Woolf, Lawrence and Joyce* (Palgrave Macmillan, 2008)

ドゥルーズやドゥルーズ＝ガタリの書物に浮遊する固有名詞は，研究者の欲望を刺激する．政治，社会制度，美学が複雑に絡み合った問題系列のなかに作品を引き入れ，社会・政治的志向と美学的実践を関連づけて問うことを可能にするからだ．本書はウルフ，ロレンス，ジョイスの作品とドゥルーズ＝ガタリの「機械」の概念を接続することで，モダニズム期の小説に書き込まれた豊穣で複雑な形而上学と，そのテクスト上の力学を明らかにするものである．哲学的命題を近代以降の世界で人間が生きること全般についてのプラグマティックな問題系列として組みなおし，さらにその思想を文体と表現形式においても実践するドゥルーズ＝ガタリの流儀に倣って，本書もまた，内容と形式の両方に配慮することを心がけている．ウルフの『灯台へ』『波』，ロレンスの『虹』『恋する女たち』『チャタレイ夫人の恋人』，ジョイスの『ユリシーズ』を取り上げ，有機体と機械に対する両義的態度，機械的（マシニック）なものに対するアプローチの観点から分析し，モダニズム文学の見取り図作成を試みている．

モダニズム期の小説には，人間の生に機械が侵入するようになったことに起因する有機体と機械の葛藤がさまざまなかたちで書き込まれている．ドゥルーズ＝ガタリの思想の枠組を借りて，ウルフ，ロレンス，ジョイスの作品における有機体と機械の取り扱いを，とりわけその形式的実験や言語・修辞的実践に注目して検討することで，作家がいかなる形而上学的工夫や生成変化をもって機械に対処したのかを明らかにすることができるという．著者の分析によれば，作家たちの機械との対峙の仕方は，時空間的（ウルフ），身体・物質的（ロレンス），言語的（ジョイス）なものとして類型化できる．

本書の実験的精神は，ドゥルーズ＝ガタリの概念を文学批評に援用するのみな

らず，その読解自体が批評的な機械として機能することを目指しているという点からも伝わってくる．ただし，ドゥルーズ＝ガタリの思想を効果的に役立てるのは必ずしも容易ではない．とくにロレンスの作品分析に関して言えることだが，独創的な指摘はあまり見当たらず，ロレンス研究の王道である二元論の議論の限界を抜け出ていない．また，ドゥルーズ＝ガタリや個別の作家について論じる際に，具体的な例証や引用を欠いたまま抽象的な議論が展開されることがあり，やや独善的な論の運びになっている感は否めない．

各章の構成は，以下のとおりである．第二章ではウルフの『灯台へ』を取り上げて，ドゥルーズのベルグソン論を補助線としつつ，語りの時空間的な特徴を指摘する．この時空間的な語りは，主体／客体，精神／物質といった哲学の二元論的分類を無効にし，時間，空間，意識に対する新たなアプローチとなりえていると論じる．

第三章は，ドゥルーズ＝ガタリが『アンチ・オイディプス』のなかで展開した社会の歴史的発展論の図式に基づき，ロレンスの『虹』を分析する．ブラングウェン家の各世代に代表される三つの時代区分を，「原始土地機械」「専制君主機械」「資本主義機械」の概念との対応関係において理解している．生命，時間，意識の内在的，形而上学的な構造を描くことで，作家は台頭する機械への応答を試みていると指摘し，ウルフの『灯台へ』と同様の方法論を採用した作品とみる．

第四章では，ジョイスの『ユリシーズ』を取り上げ，作品の言語的実践のなかに，モダニストならではの窮境を読みとっている．著者によると，『ユリシーズ』の言語にみられる意識過剰で機械的（マシニック）な特性は，「原始土地機械」「専制君主機械」「資本主義機械」に相当する三つの歴史的様態「プリミティヴ」「シンボリック」「イマジナリー」を内在化したものだという．

第五章と第六章は，ロレンスとウルフの後期作品に焦点をあて，近代資本主義の時代に対応する「イマジナリー」な様態がどのように扱われているかを検討している．機械的（マシニック）なものに対してどのような美学的，イデオロギー的解答を与えるかという問題において，ロレンスとウルフは対照的な態度をみせたという．ロレンスの場合，『恋する女たち』から『チャタレイ夫人の恋人』にいたる過程で，機械は作家を身体的，言語的に袋小路に追い詰め，窮境をつくり出した．一方，

ウルフの場合は，『オーランドー』や『波』にみられるように，機械はあくまで美学的な潜在力と自由を与えるものであったという．

ロレンスを取り上げた第三章と第五章では，ドゥルーズ＝ガタリによる社会の歴史的発展論，すなわち「原始土地機械」から「専制君主機械」「資本主義機械」への段階的移行の理論に基づき，『虹』以降の作品の分析が行なわれている．有機的志向から機械的志向をもった社会に移行するにつれて，人間の意識もしだいに機械化していく過程を描いた物語として『虹』を読むことができる．ブラングウェン家各世代をドゥルーズ＝ガタリの「原始土地機械」「専制君主機械」「資本主義機械」との対応関係において理解し，登場人物の社会・経済活動がその帰属する世代に応じて「プリミティヴ」「シンボリック」「イマジナリー」な状態にあると指摘する．

第一世代のリディアとトムは大地に根ざした牧歌的な生活を営むが，これはドゥルーズ＝ガタリの概念でいう「原始土地機械」の段階にあたり，欲望の自由な流れが守られ，身体と土地の相互関係のうちに経済的交換が行なわれる状態である．第一世代をえがく筆致には，意味作用の曖昧さ，人物同士が交わす言葉の知覚しえなさ，匿名性の高い人物造形といった特徴がみられ，リディアとトムは内在的統一をもった個人として描写されている．

アナとウィリアムは，原始的な共同体における土地と人間の連接が失われた後に到来する「専制君主機械」に属する．この段階は，欲望の流れが神や国家といった超越原理を通してコード化される．ウィリアムの宗教への傾倒は，作品世界に招喚された超越原理への憧憬として理解される．また，社会が直接の生産活動から遠ざかるにつれて，社会生活の抑圧のなかで男女が生命力を失ない，支配／従属の関係性に組み込まれてしまうことに対する批判が鏤められていると指摘する．

アーシュラは「資本主義機械」の時代に生きる世代を代表する．この段階は，脱土地化した社会組織体と脱コード化した資本主義的生産によって特徴づけられるが，高度に抽象的な分裂症的幻想を惹起しやすい．アーシュラが性，教育，職業について自由で解放された考えをもつ人物として描かれていることから，作家が近代的主体に対して一定の期待を寄せていることがわかるという．

『虹』は，社会が段階的に発展し，機械性と観念偏重の傾向を増すにつれ，登場人物の「身体／有機体」が「精神／機械」に従属するようになる過程を記録している．著者は，社会的，物質的，精神的な環境，条件が変化していくにもかかわらず，ブラングウェン家の素質が差異や変異を生成しながら引き継がれていくさまを，同素体になぞらえて理解している．

作家自身の政治的挫折や失望の経験を経て，『虹』の後半部で示されたモダニティに対する期待とオプティミズムはそれ以後消えていく．『虹』では，三つの時代を横断する語りのリズムのなかで，作中の出来事は歴史的かつ偶発的なものとして扱われていたが，『恋する女たち』では時間が圧縮され，すべてのものが既知で使い古しにすぎないという現代風の諦観が黙示的な口調をつくり出している．モダニティに対する作家の態度は両義的になり，生命と機械の対立，自由と隷属のパラドックスが作品の前面にでてくるようになる．ロレンスは作品の政治的色調を強めることと，ナラティヴ上の工夫 —— 自由間接話法の使用，介入的な語り手を用意することで，直面した危機を乗り越えようとしたという．

著者によると，これらのナラティヴ上の戦略は，『チャタレイ夫人の恋人』のなかでもっとも効果的に使われている．冒頭で，現代の悲劇についてアイロニカルな口調で語る自由間接話法は，語り手と登場人物の境界を攪乱させる効果をもつ．この話法は，語り手，人物，読者のあいだに相互関係をつくり，テクスト上に複数の主体／主観を巻き込んだ多元的な空間を用意する．また，物語に介入する語り手は，資本主義社会における価値観の相対化に対して，道徳的統制を維持する目的で導入されているという．家父長制の原理を体現する同種の語り手は『アーロンの杖』にはじめて登場したが，『チャタレイ夫人の恋人』では，帰属する文化からは距離をおく人物としての立場から救世主的な声を響かせている．この非人格的な語りは，健全な社会の回復と，従来とは異なったかたちでの機械との関係性を待望する作家の危機意識が生み出したものだと述べる．

ドゥルーズ＝ガタリの思想を内容と形式の両面に配慮しつつ文学批評に接続するという方法論と情熱は高く評価できる．ただし，作品を分析する手つきの危うさと，具体的な例証をほとんど伴わない論の展開に加え，個々の作品解釈にはあまり意外性があるとは言えず，従来の研究で言われてきた内容をドゥルーズ＝ガ

タリの思想と用語を駆使して説明したという感じが拭い去れない．とらえがたく難解なドゥルーズ＝ガタリの理論を援用することが容易でないことは確かだが，機械の概念についても，資本主義や国民国家との関係性が十分には掘り下げられていないため，その本来の奥行きや政治的射程を作品解釈に活用できているとは言えず，思考のダイナミズムをどこまで生かしきれているかには疑問の余地がある．

（三宅美千代）

## Carl Krockel, *War Trauma and English Modernism: T. S. Eliot and D. H. Lawrence.* (Palgrave Macmillan, 2011)

日本における戦国時代，西洋における中世に次いで，第一次・第二次世界大戦を経験した前世紀，すなわち20世紀は世界的にも最も暴力的で血生臭い時代であったと言えるだろう．あまりに多くの血と死を見た世紀であった．英国で出版された本書は，西洋文化を象徴すべく当然のことながら，その焦点は第一次世界大戦に集中する．本書の目的は，「第一次大戦」という＜歴史的事実＞と，それを捉えようとする詩や文学をはじめとする芸術的な＜美学＞との間に知らぬ間に生じてしまっている隔たりを埋めることである．この穴埋め作業が前世紀には欠けていたことを指摘し論を始める．

Introductionにおいて著者は，戦争詩人として有名なSiegfried Sassoonや，Wilfred Owenを主に取り上げるが，彼らの作品とて，実はあまり批判的に読まれていないことを指摘する．というのも，彼らが実際に戦地に滞在した期間は非常に短く，サスーンに至っては前線の直接的な戦いには加わらなかったからだ．それでも彼らは間違いなく戦争について語った詩人ではあるが，果たしてどれだけのリアリティーを伝えられたかということである．事実，一兵士として一人前に任務が遂行できていないことについて彼らは自身のことを，「腰抜け（coward）」「ペテン師のような（a bit of fraud）」と称している．彼らの詩には，戦争の恐ろしさそのものよりも，むしろ兵士としての恥じらいや自責の念がトラウマとなって

いる様子が伺えるのかもしれない．そこで筆者は，このようなオーエンやサスーンなどの戦争詩人が抱えるトラウマがD. H. LawrenceやT. S. Eliotの作品に見受けられると提議する．もちろん，二人とも戦地に駆り出されたこともなければ，塹壕に身を隠し恐怖に怯えたこともない．戦場をありのままに語るのは不可能である．しかしながら，それが身近であれ，遠く離れたところであれ，何かしらの大きな事件が起こっているにも関わらず，直接的に関わることが出来ず，（あるいはある程度関わったとしても）自分が無力だと感じざるを得ない状況下にある点において，オーエンやサスーンなどの戦争詩人と類似していると著者は考察するのである．本書は6章から成っており，ロレンスとエリオットが交互に3章ずつ論及されているが，本書評においては，エリオットの章を割愛しロレンスを扱った章のみ紹介することにする．

第1章 "Modernism in Crisis: *The Rainbow*"について．小説『虹』においてSkrebenskyらが従事したと考えられる南アフリカ戦争（1899-1902）に対するロレンスの歴史的誤認についても指摘しているが概ねは，その南ア戦争の描写を通して表現されていることは，開戦直前から執筆を開始していたロレンスの大戦に対する葛藤が考察される．本論文の特徴としては，主に大戦初期の作者の感情に注目している点と，『虹』におけるナラティブを "personal"（＝作者が意図をもって登場人物に語らせている声）と，"impersonal"（＝作品全体に潜む破壊的で暴力的なイメージを物語る声，語句）に分けて分析している点だ．大戦開始直前の1913年にはロレンスはFriedaと共にイギリスを離れMetzに逃げるが，大戦開始直後から彼は戦争と個人（＝自分）の関係性をどう「理解」し，作家としてどう「表現」し，どのような「立場」を取ればよいのか，という実に三重苦に悩んでいたという．このような苦しみの結果，Ursulaは直接的に軍人スクラベンスキーの貴族的な態度と価値観について怒りをぶちまけたり，南アにおける英国の偽善的な帝国主義の姿勢を批判したりしている．一方，impersonalな声としては，非常にロマンティックな場面を描いているにも関わらず，"victim" "blade" "annihilation" など破壊的かつ暴力的な語句，または "dissolve" "crystallised" などの科学的な語句が頻繁に使われていることに，大戦の非人間的かつ無機質，無意味な実態がそこに含意されているのだと分析する．このような表現を介し，戦争

という不可避な暴力行為に対する反発と，個人レベルではどうしようもなく服従せざるを得ない自己との間に生じた戦争初期のロレンスのジレンマやトラウマが具体的に例証されている理解しやすい論文であった．

第 3 章 "Testimony as History: *The First "Women in Love"* において筆者は，*Women in Love* における歴史的価値が未だあまり認められていないことを遺憾に思い，その価値を見出すべく，*The First "Women in Love"* において，ロレンスが心理学的知識とデカダンスの思想を用いることで，大戦後期（特に1916年の「ソンムの戦い」前後）に傷ついた感情を表現，または解放していることを証明していく．特にロレンスの心理学的知識の援用については丁寧に論じられており，初稿『恋する女』の小説全体が "therapeutic process" セラピー的なプロセスを辿っているとみている．その背景には，心理学者Dr. David Ederとの出会いにより，ロレンスはシェルショックの知識を深め，フロイド理論にも慣れ親しむようになった事が大きく影響している．彼の心理学的知識が一番鮮やかに説明されていた部分は，HermioneがBirkinの後頭部を石 "jewel stone" で殴るシーンである．この事件の描写には心理学的な「ヒステリー」の知識が生かされているし，ショックを受けたバーキンが心理的にも身体的にも回復していく過程にも心理学が反映しているという．バーキンは事件の後，病床に伏しじっと沈黙を守るが，これは例えば軍人が戦地で数十回刺されても，ショックと痛みで自分の身に何が起こったのか認識できない様子に似ている．さらに筆者は，一連のセラピー効果の結果がデカダンス思想に表れていると見出す．小説後半のLoerkeの登場と，Geraldの死の意味，または（鉄鋼）産業への執着におけるデカダンスの要素が小説のテーマであるsensualityや sexuality，またはartにおける美を引き立てていると結ぶ．これまで神話的に解釈されることが多かった場面に戦争とロレンスのパーソナルな歴史のスポットライトが当てられた．

第5章 "Working Through: Lawrence in the Twenties" では，戦後，執筆された後期ロレンス作品における「戦争の傷」をどのようにして癒し克服していったか，その過程が描かれている．休戦協定が締結した直後の1918年のクリスマスを舞台の幕開けとした*Aaron's Rod* は，この戦争の気質を表しているという．1917-21年という執筆期間の長さは，だらだらと長引いたこの戦争そのものであり，「過

去と現在と未来」をどのように結びつけたらいいのか分からず苛立つ主人公の様は，休戦の後，至る所に散在した戦争犠牲者たちと国自体が抱える不安やトラウマを反映している．戦後，ヨーロッパ諸国がヴェルサイユ条約と国際連盟に揺らぐなか，ロレンスの精神は「死か再生」か迷っていた．その間，*Memoir of Maurice Magnus* や，*Kangaroo* において戦争に貢献できなかった罪の意識を一時的に癒していた．ロレンスの心のケアは順調にいっているかのように見えたが，1923年 *The Plumed Serpent* の前身となる *Quetzalcoatl* を書き始めたころから，復讐心が暴力と化して登場した．アメリカン・インディアンとヨーロッパ人の結婚は，白人による資本主義と民主主義を振りかざした大量殺戮への仇討行為だと筆者は訴える．このような過程を経て，ようやく *Lady Chatterley's Lover* においてロレンスは本当の意味でセラピーを終了し，戦争のトラウマを克服する．『チャタレー夫人』は何度も何度も書き直されたが，それがロレンスを癒していったという．特にMellorsの結末に戦後，忌まわしい大戦の記憶に彼がどう対峙していったかが伺える．最終的にはメラーズとコニーは社会の枠組みから逃げ出すことはせず，個人レベル，または国家レベルにおいて傷ついてしまった戦後の傷を見つめ直すことにより，社会の役割や存在意義を明確にした．この作業によりロレンス自身も戦後の国家と個人の未来への展望に一つの風穴をあけることが出来たのだと筆者は分析を終える．

Conclusionで筆者は，エリオットと比べればロレンスは救済を求め，比較的分かりやすい形で生々しく傷ついた心と精神をさらけ出している作家であると述べる．時にロレンスの表現の仕方は異端的に映ったが，オーエンやサスーンなどの戦争詩人が身体的経験を語ったのと同様，ロレンスやエリオットは戦争の心理的体験を証言しているのであり，それが直接的であれ間接的であれ，兵士や一市民の口を介し現代の我々にまで語り継がれるべき精神がそこに存在することを強調し筆者は論を結ぶ．これまでのモダニズム小説と第一次大戦を考察した論考のなかでも，エリオットとロレンス作品をこれだけ幅広く同時に，しかもきちんと時系列に理路整然と分析した本研究書は大変貴重な功績である．

（角谷由美子）

# 飯田武郎『D・H・ロレンス文学にみる生命感 ―― 自然，生命，神秘』（株式会社イーフェニックス，2011）

本書は既に『D. H. ロレンスの詩―闇と光をめぐって』（九州大学出版会，1986）や『D. H. ロレンスと神々の世界』（京都修学社，1994）などの著作を上梓されている飯田氏が，主としてそれ以後に発表されたロレンスの小説と詩についての論考を1冊に纏めることで，氏の考えるロレンス文学の特質を改めて浮かび上がらせようとしたものであろう．その意味でも，また方法論でも最近の批評理論を駆使した斬新で刺激的なロレンス批評書ではない．しかしながら本書はロレンスの小説，詩，エッセイなどのテクストを地道に読んで，ロレンス文学の核心的テーマである「性描写」の問題，「自然（コスモス），生命，闇」への探求といった，ともすればロレンスの研究者が迷宮に迷い込みそうな，困難ではあるが避けては通れない問題を正面から堂々と大胆に論じているところにその意義がある．同時にロレンスをコンラッド，フォースター，ハーン，メアリー・ウェブ，遠藤周作，伊藤整などの作家と比較してロレンス文学の普遍性を比較文学的な広い視野から論じているのも特色であろう．こうした方向は，今日文学研究そのものが困難な状況にある中で，我々に一つの示唆を与えてくれるのではないかと思う．本書第一部は小説論で，上述した作家たちとの比較を通して，「異文化接触」の問題，「性描写」の問題，「性描写と自然描写」の問題を論じる．第二部は飯田氏の得意とする主として詩についての論考で，ロレンスの詩における「自然」，「生命」，「闇」への探求といった核心的テーマを初期，中期，後期の詩を通して論じる．以下，各章の内容について概観しつつコメントを加えてみたい．

第一部第一章「コンラッドの『闇の奥』とロレンスの『翼ある蛇』―異文化接触と河」では，この二つの小説の舞台がアフリカのコンゴとメキシコというかつてのヨーロッパの植民地であり，そこでヨーロッパ人が現地の人々にどう接しているか（異文化接触の問題）を扱っているところは共通しているという．しかしながら，コンラッドの描くヨーロッパ人クルツやマーロウは原住民の文化に無知なままであるのに対して，『翼ある蛇』のヒロインのケイトは現地の自然や宗教

に共感していく．それは『闇の奥』の冒頭に描かれる帝国主義者を運び出す「テムズ河」やマーロウたち白人をアフリカの奥地へと運び込む「コンゴ河」の役目と，『翼ある蛇』でケイトを現地の宗教指導者ラモンのいるサユラ湖に運ぶ「川」（ケイトを「再生させる川」と解釈されている）の違いによっても分かる．ロレンスは異文化を理解する目を持つケイトを通してヨーロッパ文化中心主義を批判していて，この点で『オリエンタリズム』のサイードの先駆でもあるという．評者が思うに，論題の「河」は場所と場所を結ぶもの，大きく言えばある文化と他の文化を繋ぐもの（文化交流），この意味で「河」こそ異文化接触の象徴とみることもできよう．このあたりのことも言及されてもよいのではないか．

第二章「フォースター，ロレンス，ハーン，遠藤周作に見る異文化理解—ヨーロッパ文化中心主義から文化相対主義へ」では，フォースターの『インドへの道』，ロレンスの『翼ある蛇』，遠藤周作の『深い河』，ハーンの『心』と『日本—解明への一試論』を比較して，それぞれの作家が異文化に対してどう対応しているか（異文化理解）について考察する．『インドへの道』では植民地インドにおける様々なイギリス人が描かれているが，ムア夫人だけが不十分ながらもインドの文化を理解する人物となっているという．『翼ある蛇』ではケイトはメキシコ・インディアンの宗教的な踊りを自ら体験し，その文化を理解しようとしているという．『深い河』では，日本人大津神父はインドではヨーロッパのキリスト教徒は異なるキリスト教が必要であると思い，ヒンズー教徒とも対等に交流しようとする所に異文化理解の姿勢があるという．ハーンも『心』や『日本—解明への一試論』の中で，ヨーロッパの文化と異なる日本文化の底流にある神道（自然崇拝）と仏教（祖霊崇拝）を理解しようとする．こうしてみるとフォースターにはヨーロッパのキリスト教に対する批判があまりないが，ロレンス，遠藤，ハーンにはヨーロッパ文化中心主義から異文化も理解しようとする文化相対主義へと価値観の転換が窺われるのだという．文学作品を異文化理解とか文化相対主義といった視点から論じたものはどうしてもステレオタイプ的な論になりがちであり，本論にもこうした傾向がないとは言えないが，飯田氏の主張は説得力があり明快である．また異文化接触という広い視野からロレンス以外の多くの作家と比較する視点は，文学研究と文化研究の接点を探る試みとして示唆的である．

第三章「伊藤整とD・H・ロレンスの性描写の特質」は男女の性愛に対するこの二人の作家の違いを浮き彫りにしてくれる．伊藤整はロレンスを日本に紹介した作家として知られているが，自らも男女の性愛を小説で描き続けた作家である．この二人の作家の「性描写」を比べてみると，ロレンスの場合，『恋する女たち』ではバーキンとアーシュラの「神秘的な夜」の性体験の描写は，視覚や理性で捉えられない直感によって知りうるものであり，『チャタレイ夫人の恋人』では，コニーとマイクリスとの不毛な性体験と対比する形でコニーとメラーズの性体験の描写が詳細に論じられ，この二人の場合は森という聖なる自然の生命と深く関る形で描写されているという．伊藤整の場合は，『発掘』『氾濫』『虹』では共通した性が描かれ，主人公たちは妻に隠れた情事により束の間の解放感を求め，ロレンスのように結婚の永遠性や生命の根源に結び付く性は描かれていないという．ただ伊藤の『変容』では，結婚という枠から解放された性を通して人間性を見ている点でロレンス的な性の思想に近いが，モラルが欠如している所に日本的な「感覚の文学」という特性を示しているという指摘は面白い．

第四章「メアリー・ウェブの小説—女性の肉体・性描写の特質—同時代人ロレンスと比較して」では，ロレンスの同時代人作家で女性の視点から性や，それと関る自然を描いたメアリー・ウェブの小説がロレンスの場合と比較して論じられる．ロレンスの『息子と恋人』で，ミリアムが恋人ポールに自己犠牲的にみずからの裸体をさらす場面ではヴィクトリア朝風性道徳観に囚われた女性が描かれているが，ウェブの『破壊』では自らの裸体を恋人に見てもらおうとするブルー・サーンはヴィクトリア朝風の抑圧的な肉体観から解放された女性像を示しているという．更に，ウェブの『逃げる』では，ヒロインのヘイゼルは精神性だけにこだわる夫に満たされず官能的な恋人に惹かれ，また自然の生命を本能的に感じることのできる女性で，この両側面からみてロレンスの描くコニーに近いと言える．この時代はセクシュアリティに対する意識が大きく変わった時代であり，それは絵画における女性画家による女性の裸体画や女性誌『ザ・フリーウーマン』などにおける女性の性意識の問題を扱う論文などで例証されていて，このような女性に対する社会状況の変化もウェブの小説に反映されているとみている．

第二部はロレンスの詩を中心に，著者自身が信ずるロレンス文学の核心に迫ろ

うとするものである．ここで主として考察される「自然崇拝」「根源的闇」「神秘的生命感」というテーマ自体はロレンス文学の読者であれば特に目新しいものではない．ある意味ロレンス研究者を惑わす迷宮の闇に誘い込み兼ねないものであるが，著者は独自の視点からこれらの困難な問題を明快に論じていて，評者には読み応えのあるものであった．

第二部第五章「D・H・ロレンスと自然崇拝」では，ロレンスの初期から後期の詩（時として小説・エッセイにも言及して）を中心に，そこに窺える自然崇拝（パン神や地霊・太陽崇拝も含め）について考察する．初期の詩では「野生の共有地」を採り上げ，共有地の自然を生命あるものとして感得する詩人の個性に着目する．中期の詩では『鳥とけものと花』の「蛇」を論じ，蛇を「神」「生命の王者」と感ずる詩人は古代人の自然崇拝に近いが，同時に詩人の中の「教育の声」に示される「自然の支配」という近代ヨーロッパ思想との内面の葛藤が描かれているという．「アーモンドの木」でも樹木の持つ聖性を直感する詩人の想像力を指摘するが，後期の詩集『いらくさ』『続三色すみれ』の中の「人々」「おお，すばらしきかな，機械よ！」では，機械に支配される現代人，太陽や月などコスモスとのつながりを失った人々を嘆く．『最後詩集』では，「月への祈り」で月の癒しの力に憧れ，「バヴァリアの竜胆」で大地の女神ペルセポネーと共に地下の闇の世界の再生力に憧れる詩人を浮き彫りにする．そこに最後のエッセイ『アポカリプス』に示される自然（コスモス）の中に神を直感しコスモスとの結びつきを信じた古代人の感性，自然崇拝の心を現代人も取り戻すべきであるというロレンスの主張が肯定的に繰り返されている．

第六章「霊的詩人D・H・ロレンス—根源的闇の探求者—初期，中期，後期の詩に探る」は，「存在の内なる闇」への，霊性への探求者としてのロレンス像を論じた興味深いものである．この闇への心の旅は三段階に分けられるという．第一段階は闇への憧れを描く初期の詩群（例えば，『押韻詩集』の「不安」など）であり，第二段階は闇との一体化体験を描く詩群（例えば，『見よ！私たちは切り抜けた』の「新しい天と地」など）である．第三段階は根源的闇体験の普遍化を描くもので，『鳥とけものと花』では自然界の生き物（「亀」や「アーモンドの木」など）に闇を探り，更に「聖マタイ」でキリスト教神秘主義を思わせる闇の

世界への沈潜（「否定の道」）が描かれる．こうした聖なる闇での死と再生という体験は，古代ギリシア以来のヨーロッパ神秘主義の伝統に遡ることが出来，ロレンスはこうした体験を『最後詩集』で普遍化して，その締めくくりが「死の船」であるという．このように存在の根源的闇への探求は初期から後期へと一貫してなされているという．

第七章「D・H・ロレンス—「生命の流れ」と神秘的生命感」は前章の「根源的な闇」への考察と共に，著者にとってのロレンス文学の核心部をなすものであろう．著者はロレンスにおける「生命の神秘感」を四つに分けて論じる．第一に「男女の性的接触による神秘感」で，これは男女の性を通して生命の神秘感を描く．例えば，バーキンとアーシュラの「遠出」における言葉を超えた肉体の神秘的直感，更に『チャタレイ夫人の恋人』や『逃げた雄鶏』における性の交わりが自然の生命と結び付く場合など．第二に「自然との触れ合いによる神秘感」で，例えば『鳥とけものと花』における蛇や樹木の生命に触れてその生命的交歓を歌うもの．第三に「身体運動による神秘感」で，例えば『翼ある蛇』ではケイトやラモンは身体的運動で宗教的感情を深め，原住民の人々は「踊り」によって自然との合一感を得る．第四が「宗教的瞑想による神秘的至福感」で，例えば『最後詩集』における闇への瞑想，闇への自我滅却を通しての再生という至福感を歌う「死の船」である．前章でも繰り返し論じられた「否定の道」という古代ギリシャ以来の伝統を，ロレンスはこれによって現代に蘇らせようとしたのだという．

最後に少し気になったところを指摘しておきたい．一つは個々の詩の題名が日本語表記のみで英語の原題が付されていないために，引用原文を参照する場合に時として苦労することもあり，また訳者によって題名がまちまち（例えば，'Restlessness'を本書では「不安」，他の訳者は「動揺」とする等）の場合もあるので，できれば索引にでも原題が付されてある方が親切ではないかと思った．あと些細なことであるが，「不安」詩からの引用で"leaves"は「木の葉」なのか（「本の頁」ではないのか），少し気になった（138）．勿論，著者が長年取り組んでこられたロレンス文学への深い理解と愛着を感じさせる本書への，評者の評価と敬意が些かも揺らぐものでないことは言うまでもないことを付言しておきたい．

（鈴木　俊次）

# 浅井雅志『モダンの「おそれ」と「おののき」——近代の病痾の診断と処方』（松柏社，2011年）

800頁を超える大著である．15年にわたって書き続けられた論文をもとに構成されているという．本書こそ，読み手に「おそれ」と「おののき」，畏怖の念を抱かせる．残念ながら索引や本書全体の文献一覧がないので（各章末に注と引用文献がある），キルケゴールの『おそれとおののき』（1843年）との関係や，本文中での「おそれ」「おののき」の具体的な使い方等を読了後にあらためて確認するのは困難だが，「モダン」については冒頭で次のように述べられている．つまり，「モダン」とは「自省，あるいは内省する力，すなわち頭脳がリフレクティヴな力を具えるようになった時代以降すべて」を指す．浅井自身も認めているように，このような「モダン」の定義は，時代区分そのものとしてはさほど重要性をもたない．むしろ副題にある「近代」の方が時代を区切る言葉であり——「モダンとは近代の謂いであるが」と本書は始まる——，そのカタカナ表記でもある「モダン」とは，「リフレクティヴな能力の生み出した功罪」の，そして「この複雑といえば複雑な人間の意識のありよう」の歴史的条件，と考えた方がいいだろう．

わたしたちの関心の中心にあるD・H・ロレンスは，本書においては，このような意味における「モダンの中の人間，すなわち『近代人』」のひとりである．ここに，浅井がロレンスの「読み」として「脱神話化」にこだわり続けたことの意義がある．「近代人」のロレンス，「モダン」と格闘し続けたロレンス．いわゆる近代主義批判も，「近代人」として「モダンの中」に生きている証左となる．ロレンスや同時代の知識人たちのモダンとの苦闘の足跡を，その「失敗」も含めて丹念に追い続けた成果が，800頁を超える大著となっている．

「モダン」に加えてもうひとつ，本書の特徴を表すキーワードが，「読み」である．浅井は言う——「読みとは，つまるところ，テクストに沿いつつ，それを土台にして飛翔することである．テクストに忠実でありつつ，しかもそれからど

れだけ遠くへ飛べるかが勝負となる」．テクストに寄り添いながら，しかしそのなかに浸ったまま――おそらくそれは「神話化」につながるのだろう――でいることなく，テクストを「土台」にしてできるだけ遠くへと「飛翔」する．このような根本的に矛盾した行為はいかにして可能なのか．そのモデルは，『アメリカ古典文学研究』であるという．ロレンスがアメリカ古典文学を読んだようにロレンスを読む．浅井がロレンスから学び取ったのは，その独特なテクストの読み方なのかもしれない．テクストからの「飛翔」は，第一章のT・E・ロレンス，マックス・ウェーバー，ニーチェを始めたとした，読者の知的好奇心を刺激する数多くの固有名の登場と，それぞれのテクストの「読み」によって支えられている．ロレンスを「神話化」した，いわゆるロレンス専門家たちの見解を丹念に批判的に検証して「脱神話化」にたどり着く，という手順を踏むことはないけれども，「時代精神の表象あるいは言語化」をめぐるロレンスの苦闘，そして彼の「時代の雰囲気を感知する鋭い触覚」は十分に明らかにされている．

さて，本書は全22章の5部構成となっている．第1部の4つの章では，「近代の病」の「診断」が扱われる．とくに第一章は本書全体の議論の土台を提供していると言えよう．そこでは，ほぼ同時代を生きた二人のロレンスとウェーバーが，いかに20世紀初頭，とくに「それまでほとんど無批判に信じられてきたヨーロッパ的諸価値そのものが動揺する」第一次世界大戦後，「時代に対する懐疑と不安という形」をどのように描き出しているかを比較検討している．続いてロレンスの教育論（第2章），ユング（第3章），イエイツ（第4章）を取り上げた後，第2部から第5部までは，「近代の病痾」に対する「処方箋」を提示する．第2部は肉体，第3部は神秘思想，第五部は死をキーワードとして「処方箋」の方向が示され，第4部は文化論や言語論の「インタールード」と位置づけられている．

本書はあくまでも「モダンの中の人間，すなわち『近代人』」の「リフレクティヴな能力」，つまり「自意識」「自省」「内省」に焦点をあてており，批評的パラダイムとしてそれは，構造主義以前の議論と親近性があるかもしれない．だがその一方で，第1部，第2部，第4部のいくつかの章にみられるように，ミシェル・フーコーやエドワード・W・サイード以降の議論を踏まえた他者表象の分析

も展開している.「『オリエンタリズム的パラダイム』の光と影」という副題をもつ第16章では，フーコーの知／権力論を跡づけながらサイードの功績を理論的にも再検討している.

評者にとって興味深いのは,「近代人」の「自意識」の問題と,「オリエンタリズム的パラダイム」の他者表象の問題を本書においてつなぐ存在として, T・E・ロレンスがいると思われる点である. 第一章「『時代の病』の表象――D・H・ロレンス, T・E・ロレンス, マックス・ウェーバー」で浅井は次にように書いている.

> サルトルの有名な言葉に,「地獄とは――他者だ」(47) というのがあるが, この「他者」とはあなたを見つめる人間の謂いである. すなわちこの言葉は, 他者から見られることが意識の二重化を引き起こし, 自然に振る舞うのを阻害するという状況を見事に言い当てている.「自意識的な」とは, この「他者の眼」を自らの中に取り込んでいる状態, つまり自分の意識そのものが二極分解して, 外界を見る意識と自分を見る意識が同時に存在し, しかも両者が調和せず, 一種のダブルバインドが生じている状態を指す.

注目すべきは「他者の眼」なのだが, 実はこの引用は, 第1章第1節における『白孔雀』をめぐる分析からのものである.「生の意味から完全に切り離された自分」に気づいたジョージは, シリルの場合以上に,「生からの疎外感, 意味の喪失感, そしてそれが引き起こす『存在論的不安』」に苛まれている. そしてこのような「自意識の病」に苦しんだのが, T・E・ロレンスである, と第2節で議論が展開されることになる. この流れを念頭に置いたとき, 上の引用における「他者の眼」という表現が重要性を帯びてくる.「自らの思考や行動を自らがチェックする」という「意識のもつ『自省』機能」において, チェックする「自ら」とは, もうひとりの私, つまり比喩としての「他者」あるいは他者性などではなく, 文字通りの「他者」の存在を前提にしていると考えるべきではないだろうか. 意識の「二極分解」を,「外界を見る意識と自分を見る意識」と言い換えてしまったとき, 残念ながら「『他者の眼』を自らの中に取り込んでいる状態」

という表現の重要性が薄れてしまう．しかし，アラブ世界におけるT・E・ロレンスの自意識へと議論を展開するためには，文字通り「他者の眼」への注目が必要となってくる．

言い換えるならば，「自意識」なるもの――近代ヨーロッパ的主体の基盤――に先立って「他者の眼」がある，という指摘が重要ではないだろうか．「他者」を意識すること，「他者」につねにすでに見られていることを意識することが「自意識」なのであって，「他者」なしで「自」は存在しない．まさにそのような「自意識」の場で「アラビアのロレンス」は生まれ，そして死んだ．よってT・E・への注目は，D・H・とのたんなる比較以上の意味を持つだろう．T・E・ロレンスの人生は，「他者の眼」の内面化という自意識を抱えた「モダンの中の人間」の苦闘にほかならない．そのような観点から，とくに第1，5，6，16章の議論を再検討してみる課題が読者には与えられている．

T・E・ロレンスについては，結論的に，次のように述べられている．

> 自意識＝「眼」の罠との闘いに彼は破れた．しかしそれは，ニーチェが，あるいはD・H・ロレンスが破れたというのとまったく同じ意味で破れたのであり，その「敗北」，すなわち「確実」で崇高でさえある「失敗」においてこそ「自己の運命を完遂した」のである．ニヒリズムが微妙に姿を変えながらも，いよいよその様相を濃くしている現代に生きるわれわれにとって，彼の「失敗」の意味はあまりに大きく，また重い．

D・H・ロレンスの「自意識＝『眼』の罠」と他者表象との関係については，第3章でユングにおけるそれと比較しながら検討されている．そこで指摘されている「投影的他者表象」あるいは「読み込み」のオリエンタリズム的メカニズムは，「他者の眼」の取り込みの議論を踏まえるとさらに興味深く思われる．

D・H・ロレンスの「敗北」「失敗」は，第20章「引き裂かれた聖霊――ロレンス晩年の作品群におけるヴィジョンの分裂」において説得力をもって論じられる．そこで中心的に取り上げられている作品は，『チャタレー卿夫人の恋人』『アポカリプス』「死んだ男」「島を愛した男」である．浅井は丁寧に四つの作品の類

似点だけでなく重要な差異を確認しながら，ロレンスの限界を誠実に記していく．とくにこの章の結論部分は，常に意識し続けたと言う「脱神話化」とはいかなる読みであったのかが示されている．

800頁を超える長さに加えて全体の構成のありかたにしても，本書はかならずしも読みやすいとは言えない．しかしそれは，あくまでも「モダン」の重さにこだわった著者の姿勢の現れであると考えたい．本書が，「モダンの中に生きる人間」D・H・ロレンスをめぐる論考として，今後つねに参照すべきひとつの達成であることに間違いない．

（木下　誠）

# ロレンス研究文献

## (2010年9月～2011年8月)

(日本在住の研究者あるいは国内出版の英語文献)

Hoshi, Kumiko, (論文)"D. H.Lawrence in Victorian relativism: a 'theory of human relativity' in *Aaron's Rod*," 『慶應義塾大学日吉紀要』第59号(慶應義塾大学日吉), 2011年.

Miyake, Michiyo, (論文)"The Revolt against Nationalism: A Socio-Musicological Approach to *Aaron's Rod*, " 『D. H. ロレンス研究』第21号(日本ロレンス協会), 2011年3月.

Oh, Eunyoung, (論文)"Is Ramón an Ideal Leader?: Lawrence's Presentation of Male Leadership in *The Plumed Serpent*," 『D. H. ロレンス研究』第21号(日本ロレンス協会), 2011年3月.

(日本語文献)

青木晴男, (論文)「ロレンスのキリスト教批判 ―― パン神を通して」, 『ふまにすむす』第22号(高知女子大学), 2011年3月.

青木晴男, (共訳)『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』(彩流社), 2011年1月.

浅井雅志, (単著)『モダンの「おそれ」と「おののき」 ―― 近代の宿痾の診断と処方』(松柏社), 2011年3月.

麻生えりか, (共訳)『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』(彩流社), 2011年1月.

新井英永, (書評)「大田信良『帝国の文化とリベラル・イングランド ―― 戦間期イギリスのモダニティ』」, 『D. H. ロレンス研究』第21号(日本ロレンス協会), 2011年3月.

荒木正純, (論文)「伊達男, 戦場に死す ―― ロレンス「モンキー・ナッツ」と第一次大戦の表象」, 高知尾仁編『人と表象』, 悠書館, 2011年3月.

荒木正純, (書評)「D・H・ロレンス研究会編『ロレンス研究 ―― 「旅と異郷」』」, 『D. H. ロレンス研究』第21号(日本ロレンス協会), 2011年3月.

飯田武郎，（書評）「Bethan Jones, *The Last Poems of D. H.Lawernce: Shaping a Late Style*」『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年３月．
石原浩澄，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
市川仁，（論文）「D. H. ロレンスの『エトルリアの遺跡』: 古層に見る生のヴィジョン」，『中央学院大学人間・自然論叢』第31号（中央学院大学），2010年12月．
市川仁，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年１月．
井出あかね，（論文）「1913年とロレンス ―― 『チャタレイ夫人の恋人』を中心に」，『名古屋短期大学研究紀要』第49号（名古屋短期大学），2011年．
伊藤芳子，（共訳）『ロレンス愛と苦悩の手紙 ―― ケンブリッジ版D・H・ロレンス書簡集』（鷹書房弓プレス），2011年２月．
稲見博明，（論文）「『羽毛の蛇』*The Plumed Serpent* の主人公ケイトの造形の矛盾について ―― D. H. ロレンスにおけるトランス・モダンとプレ・モダンの矛盾的混淆」，『女子美術大学研究紀要』第41号（女子美術大学），2011年．
井上径子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
井上義夫，（翻訳）『D. H. ロレンス短篇集』（筑摩書房），2010年11月．
今泉晴子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
岩井学，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
岩田桃子，（論文）「*Sons and Lovers* に見られるロレンス文学の原点」，『鹿大英文學』第20号（鹿児島大学），2011年２月．
有為楠泉，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
遠藤不比人，（書評）「武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知 ―― 精読から生の動きの学びへ』」，『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年３月．
大平章，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年１月．
岡野圭壹，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
小田島恒志，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年１月．
小川享子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年３月．
榊原貴教，（書誌）「ロレンス翻訳作品年表（二十世紀文学特集（続）D・H・ロレンス特集）」，『翻訳と歴史』第52・53号（ナダ出版センター），2010年11月．
加藤英治，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年１月．

鎌田明子,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

川田伸道,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

北崎契縁,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

木村公一,（論文）「ロレンスの手紙をめぐって」, *Waseda global forum* 第7号（早稲田大学国際教養学部），2010年.

木村公一,（共訳）『ロレンス愛と苦悩の手紙――ケンブリッジ版D・H・ロレンス書簡集』（鷹書房弓プレス），2011年2月.

倉田雅美,（共訳）『ロレンス愛と苦悩の手紙――ケンブリッジ版D・H・ロレンス書簡集』（鷹書房弓プレス），2011年2月.

河野哲二,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

小手川巧光,（論文）「ローレンスの詩についての推論」,『保健医療経営大学紀要』第2号（保健医療経営大学），2010年3月.

後藤眞琴,（翻訳）「序文 劇作家 D. H. ロレンス（翻訳）（1）D. H. ロレンス,『戯曲集』編者：ハンス－ウィルヘルム・シュワルツェ＆ジョン・ワーゼン（出版社：CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年：1999年）」『東北工業大学紀要. 2, 人文社会科学編』第31号（東北工業大学），2011年3月.

近藤康裕,（書評）「Howard J. Booth, ed., *New D. H.Lawrence*」,『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月.

志水（西田）智子,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

霜鳥慶邦,（論文）「『チャタレー夫人の恋人』, 第一次大戦，記憶」,『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月.

霜鳥慶邦,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

杉山泰,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月.

杉山泰,（書評）「武藤浩史『「チャタレー夫人の恋人」と身体知――精読から生の動きの学びへ』」,『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月.

高橋克明,（翻訳）「序文 劇作家 D. H. ロレンス（翻訳）（1）D. H. ロレンス,『戯曲集』編者：ハンス-ウィルヘルム・シュワルツェ＆ジョン・ワーゼン（出版社：CAMBRIDGE UNIVERSITY PRESS 出版年：1999年）」『東北工業大学紀要. 2, 人文社会科学編』第31号（東北工業大学），2011年3月.

立石弘道，（書評）「D・H・ロレンス研究会編『ロレンス研究 ――「旅と異郷」』」，『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月．

田部井世志子，（論文）「D・H・ロレンスを通して見る死の教育の必要性 ――「死」との対峙から「生命の輪」へ」『北九州市立大学文学部紀要』第80号（北九州市立大学文学部），2011年．

田部井世志子，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

田部井世志子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

出水純子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

戸田仁，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

中澤はるみ，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

中田智子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

野口ゆり子，（論文）「ヘレン・ダンモアの『暗黒のゼナー』に描かれたロレンスとコミュニティー」，『英文学論考』第37号（立正大学英文学会），2011年．

橋本清一，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

原良子，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

原口治，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

平野ゆかり，（共訳）『D・H・ロレンス全詩集〔完全版〕』（彩流社），2011年1月．

福田圭三，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

福田圭三，（書評）「Virginia Crosswhite Hyde and Earl G. Ingersoll, eds., *"Terra Incognita": D. H.Lawrence at the Frontiers*」，『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月．

藤原知子，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

古田高史，（論文）「福田恆存の D. H. ロレンス受容 ――『放送劇 チャタレイ夫人の恋人』を中心に」，『筑波大学地域研究』第32号（筑波大学大学院地域研究研究科），2011年．

門口弘枝，（書評）「Douglas Wuchina, *Destinies of Splendor: Sexual Attraction in D. H.Lawernce*」『D. H. ロレンス研究』第21号（日本ロレンス協会），2011年3月．

宮本 正治，（論文）「政治への逡巡 ――『カンガルー』における群衆の問題」『社会情報論叢』第14号（十文字学園女子大学社会情報学部），2010年12月．

安尾正秋，（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社），2011年3月．

山下桐子,（論文）「鳥のこぼれ話（その８）D. H. ロレンスの『２羽の青い鳥』をめぐって」,『地中海歴史風土研究誌』第33号（地中海歴史風土研究所）, 2011年４月.

山田晶子,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

山田晶子,（翻訳）「D・H・ロレンス原作『ポール・モレル』（１）」,『言語と文化』第24号（愛知大学語学教育研究室）, 2011年１月.

山本智弘,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

横山三鶴,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

吉田昌子,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

吉田祐子,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

吉村宏一,（共訳）『D. H. ロレンス書簡集 VI 1915』（松柏社）, 2011年３月.

# 日本ロレンス協会第42回大会報告

2011年度の日本ロレンス協会第42回大会は，神戸大学にて，6月25日(土)，26日(日)の両日開催された．初日は，午前中に3名の会員による研究発表があった．昼食をはさんで午後には，シンポジウム「『トマス・ハーディ研究』再読のために――リベラリズム，帝国，「教養小説」の転回」が行われた．2日目は，若手シンポジウム「ロレンスのテクストの可能性」が行われ，幕を閉じた．質疑応答が活発になされて，たいへん有意義な2日間の大会であった．なお，役員会は大会前日24日(金)に開かれた．

第1日　6月25日(土)

【研究発表】

『カンガルー』におけるサマーズの誤読への抵抗

中央大学兼任講師　板谷　洋一郎

『カンガルー』は，第一次世界大戦後の荒廃したイギリスを去り，“exile”としてオーストラリアに来たサマーズが内省を通じて自己の再構築を模索する物語である．小説で，サマーズは自分に対する複数の「誤読」に直面し，内省を通じてそれらを吟味することによって，真の自己を希求していく．他者の彼に対する「読み」は，ハリエットのものを除けば，彼らが一方的に，都合のよいイメージを彼に投影したもので，アマーティア・センの言う個人の多元的アイデンティティーを自由に選び，有する権利を脅かすものである．

他者がサマーズに押しつける像は，彼が応えることのできない「読み」である．こうした誤読からの離脱によってサマーズは内省をさらに深め，文化・社会・政治的に構築されるアイデンティティーからの自由を求め，自己に内在する「孤立」の象徴“dark god”に呼びかけをしていく．

契機となるのは，他者性のシンボルである“bush”や“sea”との対話で，そこで彼は文明に抗う「知覚しえぬ」存在を感じ，感情や記憶に支配される自己からの解放の可能性を情景の中に（代替的な形で）見る．

本発表では，他者の誤読に対峙し，自己の奥深くに "calling" することにより，サマーズが自らを「対象化」し，瓦解を続ける西欧的価値観からの脱却を図り，さらなる流浪に向かう点に注目した．

*The Plumed Serpent* の主人公ケイトの二面性に対するロレンスの父権的意志：
女性の近代的自我と個

女子美術大学教授　稲見　博明

本作品は作者ロレンスが，いわゆるリーダーシップ小説の中では，もっとも心血を注いだ野心的な作品であり，作者にとっては一時，もっとも重要な作品ととられていた．筆者は，先に『カンガルー』を論じて，そこに，脱近代（トランス・モダン）の独創的な志向を読み取り，それが本作品にどのように受け継がれているのか，確認する作業を行ったが，多くの評者が指摘するように，主人公ケイトの造形の二面性の矛盾のために説得力がなく，脱近代の志向が前近代（プレ・モダン）に転じたことを論じた．

問題はロレンスの意識の中の父権的意志が，ケイトの個の脱近代的造形を阻害した点にあると考えたのである．しかしながら，ロレンスは本作品と平行して，女性が主人公となる中編小説（『聖モア』と『プリンセス』）や短編小説（『馬で去った女』）の三作品を書いているのであり，女性へのロレンスへの共感は強いものがあり，これを作業仮説として，ロレンスの母権的志向性とするならば，ケイトの造形の矛盾とはロレンスの父権的意志と母権的志向性との矛盾が衝突した結果生じたと考えられるのである．この矛盾の意味するものを，ロレンス自身の哲学と対比して本発表で考察した．

『アポカリプス論』最終ページの記述：
「私は太陽の一部であり，大地の一部であり，海の一部である」に関する一考察

東海大学准教授　田形　みどり

人格と精神性を重視するキリスト教文化社会に生まれ育った D. H. ロレンスは，青年期に至り，自己の肉体がその精神性の重圧のもとで小さく縮こまり，恐怖に震えていることに気付いた．D. H. ロレンス文学はここから始まり，その文筆活動は，終生，肉体の復権を求め模索し続けたのであった．

肉体の基盤をなす，性の復権に関するD. H. ロレンスの記述は，今日まで様々に考察されてきた．しかし，D. H. ロレンスが求めた肉体の復権は，性の復権のみにとどまらなかったはずである．死を迎える3か月前に書き残した『アポカリプス論』の最後において，「我々は，我々が肉体存在として生きており，この生き生きとした具象のコスモスの一部であるという歓喜を祝し踊るべきである．私の眼が私の体の一部であるように私は太陽の一部であり，私が大地の一部であることは私の足が良く知っている．そして私の血は海の一部である．」と述べている．人間も他の生命体と同様に地球を母体として生まれ出ている生命体であり，その肉体は自然回流の真只中にあるというこの事こそが，D. H. ロレンスが最終的に辿り着いた肉体の復権であったのではなかろうか．本論では，「人間が太陽や地球の一部であり，胴体は大地と同じ断片であり，血は海水と交流する」という事が，D. H. ロレンスにとって具体的にどのようなことであったかを，そのほんの一部ではあるが，老子・荘子における道家思想と対照させながら，考察した．

【シンポジウム】

『トマス・ハーディ研究』再読のために
――リベラリズム，帝国，「教養小説」の転回

司会・講師 成城大学准教授　木下　誠

このシンポジウムは，『トマス・ハーディ研究』を再読するために，なかでも『日陰者ジュード』解釈を再検討するために，ヴィクトリア朝中期の小説から世紀末の『日陰者ジュード』(1895) さらには『息子と恋人』(1913) へと至る「教養小説」の転回，そして同時期の英国リベラリズムと帝国の文化の連続性／断絶に焦点を当てた．『トマス・ハーディ研究』というテクストの可能性は，モダニズム小説としての『虹』(1915) の「新しさ」よりもむしろ，その「新しさ」へと引き渡されずに『息子と恋人』に残存した要素に注目するときに見えてくるのではないだろうか．3人の講師は，身体，ジェンダー，土地財産の継承，「自由」と「教養」をめぐる議論，グローバルな金融資本，国際政治関係などを取り上げながら，ロレンスの「哲学的」エッセイと小説をジャンル横断的かつ歴史的な観点から再解釈した．

『トマス・ハーディ研究』再読のためのサブテクストとしては，以下の論文・研究書をシンポジウムでおもに参照した．

Elaine Showalter, "Syphilis, Sexuality, and the Fiction of the Fin de Siècle." Ed. Ruth Bernard Yeazell. *Sex, Politics, and Science in the Nineteenth Century Novel*. Baltimore: John Hopkins UP, 1986. 88-115. (Lyn Pykett, ed. *Reading Fin de Siècle Fictions*. London: Longman, 1996. 166-83に再録)

David Trotter, *The English Novel in History 1895-1920*. London: Routledge, 1993. 特に "Degeneration" "Declension" "Awakenings" "Sex Novels" などの章.

Hilary Simpson, *D. H. Lawrence and Feminism*. London: Croom Helm, 1982.

協会外からは，田中裕介氏を講師としてお招きした．田中氏は，カーライル，アーノルド，ペイター，ワイルドなどの19世紀散文研究を専門としている．そのアプローチとしては，新歴史主義以降のヴィクトリア朝研究の流れを受けて，それらを社会史，政治史，文化史との関わりにおいて読み直す作業を進めている．田中氏の発表を通して，19世紀散文の伝統を踏まえた『トマス・ハーディ研究』の読みもさらに深まることと期待される．

## 伝染する「病」——『日蔭者ジュード』から『息子と恋人』へ

講師　神戸女学院大学大学院研究生　角谷　由美子

2006年12月，書評誌 *The Times Literary Supplement* に19世紀英国の文豪 Thomas Hardy に関するある驚くべき記事が掲載された．それは元開業医である Robert Alan Frizzell 博士によるもので，これまで胆石および心不全で1912年に亡くなったとされていたハーディの一人目の妻 Emma Lavinia Hardy の死因が実は梅毒であり，ハーディから感染したものと考えられるというのである．この発表に対するハーディの専門家たちの反応は賛否両論であるが，フリゼル博士はハーディの伝記や詩に描かれるエマの病状は胆石によるものではなく，末期の梅毒患者の症状であると主張している．

エマの死後およそ100年たった今，その信憑性を確かめることは極めて困難であるが，この研究はハーディ作品のより深い理解と新たな解釈を可能にすると同時に，あらためて「梅毒」という性病がいかに19世紀のヨーロッパ社会に広範囲に蔓延し人々を震撼させた一つの大きな社会問題であったかということを再認識

させてくれる.

当然のことながら，世紀末ヨーロッパ文学にも「梅毒」を取り扱う作品が数多く登場してきたわけであるが，国や男女によって梅毒に対する先入観や，諸悪の根源とする対象がそれぞれ異なっていた．そこで，今回のシンポジウムにおいてロレンスのハーディ論を再考するにあたり，ハーディの *Jude the Obscure*，ロレンスの *Sons and Lovers* を取り上げ，梅毒に代表される性病，または総括的な「病」のイメージが，優生学や遺伝，または進化や退化といった当時の言説に触れ，いかに継続，変容していったのか探った.

## 近代イギリス小説と土地問題
### ――ハーディ，フォースター，ロレンスにおける(agri)cultureの変質

講師　中央大学兼任講師　田中　裕介

19世紀に形式の完成をみたといわれるイギリスにおける「小説」は，そのプロットとして土地財産の継承をほとんど不可欠の要素としている．ディケンズ『荒涼館』(1852-53)，ジョージ・エリオット『ミドルマーチ』(1871-72) といった展開が錯綜をきわめるヴィクトリア朝中期の小説であっても，その背後には変転する土地財産の継承という一貫した筋が見え隠れする．一方ヴィクトリア朝後期からエドワード朝にかけてのイギリス小説は概して，スコット，オースティンからディケンズ，ジョージ・エリオットまでに見られるような「正統的な」小説の形式を欠いているように思われるが，その要因を，イギリスの「伝統」の背骨をなしていた<大土地所有家族の長子相続>という制度が不安定化したという歴史的事実に求めてみたい．「継承」というテーマを受け継いでいるかに見えるフォースター『ハワーズ・エンド』(1910) において，「継承」はもはや小説の自明な下支えではなく，パロディに近いのである.

この財産継承制度の溶解を決定づけたのは，大土地所有貴族への重点的課税を財政方針のひとつとして掲げた1900年代の自由党政府による一連の政治改革であった．そしてその改革の駆動力となったのは，政策論議である以上に，ある思想，つまり世紀転換期に活発化した自由貿易論争のなかでイギリス国民の本質として理念化された「自由」であったといえよう．この「自由」の尖鋭化の過程がすでにヴィクトリア朝中期から後期にかけての政党政治のなかで加速していたの

と並行して，土地財産の流動化も19世紀最後の数十年の間に大きく進んでいたと見ることができる．19世紀後半，上流階級のあいだで土地資産を流動資産に換える流れが強まるなかで，「農業」の危機が叫ばれ，いわゆるジェントルマンは大所有地という物的財産ではなく「教養」と結びついた生活スタイルにその存立の根拠を見出すようになっていた．世紀末において急激に理念化され変質した「自由」と「教養」を，イギリス小説はどのように映し出しえたのか．その文学の試みは自ずとヴィクトリア朝小説の形式を機械的に踏襲する境域にはとどまりえなかった．ハーディ『日陰者ジュード』(1895)，ロレンス『息子と恋人』(1913)を中心に，広義の世紀転換期の小説を検討することによって，数十年にわたるイギリス社会の構造的変動を，文学テクストを通じて考察するためのヒントを提供した．

『トマス・ハーディ研究』と金融資本 ── スパイ小説／"Sex Novels"／「教養小説」

講師　東京学芸大学教授　大田　信良

ハーディのテクストにおける「梅毒」の表象・優生学や退化の言説，あるいは，エドワード朝にいたるイギリス小説がさまざまなかたちで提示する「継承」のテーマは，19世紀末から1910年代にかけてのリベラリズムの変容（チェンバレンの社会帝国主義をアスキスの自由帝国主義・ロイド＝ジョージの自由党改革主義が取り込んだ，いわゆる，ニューリベラリズム）と，密接な関係があるのではないか．本発表では，その変容するリベラリズムと同時代の，英国帝国主義の外交・軍事政策や戦略上の変化を主題化することを試みた．

そのために，世紀末に流行した帝国主義的冒険小説（Trotter "Frontiers"142-53）が，1910年前後に──より正確には，1907年の三国協商の成立前後──，スパイ小説（"Spies"167-80）に，ジャンル的変容を遂げたことを，まずは，確認した．この政治的"Awakening"(Trotter 181-93）と連動していたのが，もちろん，Social Purity から Social Hygiene へ，そして，人種の退化から再生へそのポイントが移行する優生学だったのであり，そうした1910年代の優生学を具現するかにみえる"Sex Novels"(Trotter 197-213）には，性的＝政治的"Awakening"が表象されていることを見逃してはいけないだろう．と同時に，同時期の Hardy，Maugham，Joyce の「教養小説」に目を転じてみるならば，これらのテクストは，Robert

Hichens, *Felix* (1902) や Elinor Glyn, *Three Weeks* (1907) などの "Sex Novels" とは，「批判的距離（critical distance)」を取ろうとしている，らしい．Trotter によれば Lawrence の *The Trespasser* も "Sex Novels" だが，Edward Garnett との出版企画のやり取りをした手紙を取り上げて指摘しているように，*Sons and Lovers* は「教養小説」として生産されたようであり，ポピュラー・カルチャーやロマンス＝"Sex Novels" と，単純に，同じではない．

こうしたテクスト解釈の手続きを経たうえで，「英文学」の「偉大な伝統」に属するロレンスがものした『トマス・ハーディ研究』とグローバルな金融資本との関係を，みんなで探ること，これが本発表の最終的な目論見であった．ロレンスが具現する英国リベラリズムは，一見覇権を失い衰退したり死を迎えたかにみえる英国帝国主義やその金融資本と，いったいどのような関係を結んでいたのか？精神と肉体，男性と女性，性と死，拡張と収縮，獅子と一角獣の二項対立からなる二元論，および，それと一応区別され独立しただが奇妙なかたちで共存しているようにみえる，第三項すなわち聖霊の調停を，（ニューリベラリズムや優生学の言説あるいはスパイ小説・"Sex Novels"・「教養小説」とも交錯する）帝国としての英国の文化あるいはその地政学によって，歴史化する，ということになるだろうか．

【若手シンポジウム】ロレンスのテクストの可能性

クリストファー・コードウェルからロレンスへ

司会・講師　東洋大学専任講師　近藤　康裕

ロレンスのテクストが有している可能性は，たとえば，20世紀後半のイギリスの文化に重要な影響を与えたニューレフトがロレンスの文章をしばしば引用していることに見出すことができるが，本発表では，ロレンスとニューレフトの間をつなぐ1930年代のマルクス主義者クリストファー・コードウェルのロレンス論を中心にとりあげ，唯物史観におけるロレンス評価の問題点と，その再検討によって見えてくるロレンスのテクストが持つ洞察の射程とを明らかにすることを試みた．ロレンスを読むコードウェル，F・R・リーヴィス，そしてコードウェルを読むニューレフトの論客たちのテクストなどを参照しつつ，資本主義による社会の変容がロレンスに及ぼした「圧力」と，それへの反応との臨界点に見出しうる

ロレンスのテクストがはらむ両義性は，単純にブルジョワ文化を否定する単線的歴史観で適切に評価できる問題ではないことを指摘した．そして，資本主義のグローバルな拡張がロレンスにもたらした危機と，それに対峙して書かれたテクストの可能性とを，作品の形式の変化のなかに認識論的に読み込んでいくことは，コードウェルからロレンスへの遡行が示す意義深い方法であると論じた．

## マギーからイヴェットへ
## ——ロレンスが読むショーペンハウアーとG・エリオット

講師　香川高等専門学校助教　藤原　知予

本発表では，ロレンスのテクストを「ショーペンハウアー的厭世観の克服方法が展開されたロレンスの哲学」として読む可能性を提示した．ロレンスは青年期にショーペンハウアーのエッセイ集を英訳で読み，感銘を受けた．また同時期にG・エリオットを愛読した．ロレンスがエリオットの『フロス河の水車小屋』をショーペンハウアーの『意志と表象としての世界』に展開される哲学を用いて解釈した事実をもとに，『フロス河の水車小屋』と設定の似たロレンスの『ヴァージン・アンド・ザ・ジプシー』とを比較し，ロレンスがどのようにショーペンハウアー的ペシミズムを克服しようとしたのかを分析した．両作品の類似点として，各々のヒロイン，マギーとイヴェットが共にジプシーの持つ自由に憧れ，交流を図ろうとすること，それぞれが本能の愛に目覚めること，そしてクライマックスシーンで洪水に見舞われることが挙げられる．以上の類似点をショーペンハウアーの議論を用いて解釈し，ロレンスがエリオットの小説とショーペンハウアーの哲学から影響を受けていたことを証明した．結論として，ショーペンハウアーの本能論を用いてエリオットの作品を解釈したロレンスが，マギーのアナロジー的ヒロインとしてイヴェットを考案し，マギーに叶わなかった本能的な愛を肯定することで人生を前向きに生きられるようになったヒロイン・イヴェットを描こうとしたのではないかという見解を示した．

## 「〈有〉からロゴスが生まれる」—ロレンス思想を現象学的見地から再考する

講師　和歌山大学非常勤講師　鳥飼　真人

文筆活動の初期においてロレンスが本格的に開始する「存在への問い」は，ま

さに現代思想の先駆ともいうべき様相を呈している．興味深いことにその問いは，20世紀における現象学的存在論またはそれに基づく「存在への問い」と密接に関わりあう可能性を含んでいる．本発表では以上の考えを，多くの批評家が彼の最初の哲学的作品と評している「『息子と恋人』への序文」を再度深く読み直すことによって示した．「肉」と「言」をヨハネが逆転させたという批判から始めるロレンスの目的は，キリスト教的二元性に続く新たな二元性を提示することでは決してなく，キリスト教以前の＝プリソクラティックスの時代における「肉／言」の本来のあり方を我々の前に開示することであった．ロレンスのこの姿勢は，『形而上学入門』においてハイデガーが古代ギリシア哲学の再解釈を行う際にとる姿勢と密接に関係している．本発表では以上の根拠に基づき，「序文」におけるロレンスの思想の現代性だけでなく，その中で彼が，旧来の西洋における哲学体系，さらにはそれと不可分である伝統的宗教観を転覆させる力を開示しようとしていたことを明らかにした．

## ロレンスを読むウィリアムズを読む――個人，社会，ネイション

講師　関西学院大学准教授　大貫　隆史

本報告の冒頭では，Raymond Williams, "Art: Freedom as Duty"（1989[1979]）における "original/gummed strips of words/freedom/duty" といった言葉の用法を考察した．これによって，ウィリアムズの書き物（ライティング）につきまとう「読みがたさ」の感覚を解除すべく試行した．その上で，*Modern Tragedy*（1966）におけるロレンス論の考察を試みた．*Women in Love* を読むウィリアムズは，この小説が基本的に，個人と社会の問題を，正確には個人と社会の「最終的な分離」の問題を扱ったものだとみなしている．こうした読解は，社会とネイションをほぼ同一のものと見なす議論（例えば，近年のイングリッシュネスをめぐるそれ）のもとでは，そのアクチュアリティに疑問符が付けられてしまうかもしれない．しかし本報告は，ここでのウィリアムズの同時代的な「仮想敵」――たとえば労働党首・首相ハロルド・ウィルソン，経済学者 W・W・ロストウ――をあぶり出すことで，「社会」そして「個人」という語に対するウィリアムズの用法が，同時代の支配的なそれから，微細にみえるが重要な違いを保持していたことを論じた．

# 西村孝次賞発表および掲載論文講評

今号には５編の研究論文の一般投稿があり，４編が採用された．掲載決定された複数の論文に対して，西村孝次賞の可能性をめぐり議論を重ねた結果，残念ながら今号では授与を見送ることとなった．有力な候補はあったのだが，論考のレベルの高さを丁寧に読者に説明する手続きが若干不足していたために，受賞にはいたらなかった．今後に期待したい．以下，投稿された論文に対する編集委員会での議論の一端を紹介する．

近藤康裕氏による採用論文は，マルクス主義批評の成果を批判的に検証しながら，ロレンスをニューレフトの文脈に位置づけ，彼のテクストの問題と可能性を考察している．近藤氏のこれまでの研究の延長線上にある論考として十分に理解できるし，きわめて密度の濃い議論を展開している．ただし，残念ながらところどころ論理，文章，タームなどで分かりにくい点があり，編集委員のあいだでも執筆者の真意をめぐって意見が一致しない箇所が少なからずあった．レベルの高いメタクリティシズムとして評価できる一方で，近藤氏が提示している批評のパースペクティヴにおいて，具体的にはどのようなテクストの読みがあらたに展開され，ロレンス研究のありかたが一新されるのか，という問いかけがなされた．勝手な要望かもしれないが，いわゆる作品論を読んでみたいとの意見があった．

井出達郎氏による採用論文は，短篇「島を愛した男」をめぐり，島が他と切り離された孤立の場であると同時に，あるいはそのような状態であるがゆえに，他と結びつく可能性を秘めた場であることを論じている．このような島の論理的矛盾を，井出氏は比喩や海のモチーフ，あるいは色のコントラストを取り上げながら，このテクストのもっとも重要な要素として明らかにしていく．従来のロレンス研究の系譜を引き継ぎつつ，テクストを丁寧に読み解こうとする姿勢が，編集委員会では好意的に受け止められた．いくつか強引とも思われかねない解釈があったため，担当の編集委員から修正をお願いした．

山本智弘氏による採用論文は，“The Fox”を，“British Canadian soldiers and their war brides emigrating to Canada”との関係から歴史的に解釈した論考である．着眼点，および歴史資料を用いた情報の啓蒙性が評価された．ただし，テクスト

への今回のアプローチによる批評的意義や，このような読みによるメリットなどについてもう少し説明を加えてほしいとの要望が出された．また，論理的整合性の不十分な箇所も指摘された．細かな修正をお願いし，ロレンス研究として一定レベルを十分に超えた英語論文として掲載を決定した．

高田英和氏の採用論文は，ピーターパンものへのロレンスの関心を踏まえながら，『むすこ・こいびと』をエドワード朝期の教養小説として読みなおす可能性を探った論考である．帝国主義の変容，ジェンダー，セクシュアリティなどをめぐる問題点を思い切って取り込む意気込みは評価された．提示しようとしている読みの枠組みもたいへん興味深い．ただし，具体的なテクスト解釈部分になると，その論証の仕方や内容の是非をめぐって，編集委員のなかでも意見が分かれた．そもそも，「自由」＝「イノセンス」＝「成長拒否」という図式的構図に違和感がある，との見解もあった．また先行研究の引用の使い方に，雑なところも見受けられた．今後の可能性に期待しつつ，掲載を決定した．

残念ながら１編は不採用となった．その論文では，ある用語を軸にして議論が展開されているのだが，その用語の定義が不十分であり，議論のなかで意味作用が揺れてしまうという欠点が大きな問題となった．解釈対象のテクストに正面から向き合う姿勢は評価されたので，再投稿を期待しつつ，見直すべき点を執筆者にお伝えした．

なお，投稿論文のなかには，字数制限等の規程から外れているものが見受けられた．形式よりも内容が重要であるとは言え，投稿の際には今一度，規程を確認していただきたい．

（編集委員会）

# 編 集 後 記

"It is rather hard work: there is now no smooth road into the future: but we go round, or scramble over the obstacles. We've got to live, no matter how many skies have fallen."—— あの日以来，わたしたちの周りの環境をめぐる認識，そして生活そのものが一変しました．一年が経過した今も，日々ご苦労なさっている会員のみなさまがいらっしゃることと存じます．心よりお見舞い申し上げます．また分かっていたこととは言え，報道のありかたをあらためて考えさせられました．なにが起きているのか把握できていなかった当初は，日本語と英語による情報の違いに戸惑いながらも，後者がセンセーショナルに伝えるあまりの過酷さに「そんな馬鹿な」と思っていました．しかしその「馬鹿な」の方が「真実」に近かった．この一年で学んだことをもとにどのように生きていくのか，またそれをどのように伝えていくのかが，わたしたちに求められているのだと思います．

さて，第22号には生きのいい４本の研究論文を掲載することができました．これまでの研究成果を尊重しながらも，それぞれ新たなヴィジョンのもとにロレンスを読みなおそうとする意気込みが感じられます．執筆者たちの今後の活躍が楽しみです．また，特別寄稿として，和田静雄先生の玉稿を掲載させていただきました．日本ロレンス協会の足跡を辿るこのような企画を，できることなら続けたいとも考えております．ぜひご意見やご感想をお伝えいただければと思います．

なお，本号は編集委員長のわたし，木下の不注意から，例年よりも編集作業が大幅に遅れてしまいました．関係する多くの方々にご迷惑をおかけし，発行に向けて特別なご配慮をいただきました．ここにお詫びとお礼を申し上げます．

（編集委員長　木下　誠）

**D. H. ロレンス研究　第22号**

2012年 3 月20日印刷　2012年 3 月25日発行

発　行　者　日本ロレンス協会　学会番号（10988）
代　表　者　武藤　浩史
編集代表者　木下　　誠
印　刷　所　（株）国書刊行会
〒174-0056　東京都板橋区志村1-13-15
電話03(5970)7421(代)
発　行　所　日本ロレンス協会
〒174-0056　東京都板橋区志村1-13-15
（株）国書刊行会内
Tel. 03(5970)7426
Fax. 03(5970)7428
e-mail：d.h.lawrence@kokusho.co.jp
郵便振替口座番号01300-5-44587
（口座名：日本ロレンス協会）
http://language.sakura.ne.jp/dhlsj/

# Japan D. H. Lawrence Studies
# No. 22 2012

## Articles

Epistemology of a "Border Country": From Christopher Caudwell to D. H. Lawrence
..... Yasuhiro KONDO

"The Man Who Loved Islands" and D. H. Lawrence's Cosmos
..... Tatsuro IDE

A British Canadian Soldier and a War Bride in "The Fox"
..... Tomohiro YAMAMOTO

The Men Who Would Not Grow Up: D. H. Lawrence, J. M. Barrie, and Empire
..... Hidekazu TAKADA

## Special Contribution

Reminiscences of D. H. Lawrence Society of Japan: The Early Stage
..... Shizuo WADA

## Book Reviews

Beatrice Monaco, *Machinic Modernism: The Deleuzian Literary Machines of Woolf, Lawrence and Joyce* ..... Michiyo MIYAKE

Carl Krockel, *War Trauma and English Modernism: T. S. Eliot and D. H. Lawrence*
..... Yumiko SUMITANI

Kakeo Iida, *D. H. Lawrence's Sense of Life in His Literature: Nature, Life, Mystery*
..... Syunji SUZUKI

Masashi Asai, *Fear and Trembling of Modern Times: Diagnoses and Prescriptions for Modern Chronic Diseases* ..... Makoto KINOSHITA

D. H. Lawrence Society of Japan